

餘る弟を取つて抑へた様な気がしたので、後が大變云ひ易かつた。

「代さん、あなたは不斷から私を馬鹿にして御出なさる。……いゝえ、厭味を云ふんぢやない、本當の事なんでもの、仕方がない。さうでせう」

「困りますね、左様眞剣に詰問されちゃ」

「善ごさんすよ、胡麻化さないでも。ちやんと分つてるんだから。だから正直に左様だと云つて御仕舞なさい。左様でないと、後が話せないから」

代助は黙つてにや／＼笑つて居た。

「でせう。そら御覽なさい。けれどそれが當り前よ。ちつとも構やしません。いくら私が威張つたつて、貴方に敵ひつこないのは無論ですもの。私と貴方とは今迄通の關係で、御互に満足なんだから、文句はありやしません。そりや夫で好いとして、貴方は親父さんも馬鹿にして入らつしやるのね」

代助は嫂の態度の眞卒な所が氣に入つた。それで、

「えゝ、少しは馬鹿にしてゐます」と答へた。すると梅子は左も愉快さうに、ハ、ハ、と笑つた。さうして云つた。

「兄さんも馬鹿にして入らつしやる」

「兄さんですか。兄さんは大に尊敬してゐる」

「嘘を仰しやい、序だから、みんな打ち撒けてお仕舞なさい」

「そりや、或點では馬鹿にしない事もない」

「そら御覽なさい。あなたは一家族中悉く馬鹿にして入らつしやる」

「さうも恐れ入りました」

「そんな言譯はどうでも好いんですよ。貴方から見れば、みんな馬鹿にされる資格があるんだから」

「もう廢さうぢやありませんか。今日は中々きびしいですね」

「本當なのよ。夫で差支ないんですよ。喧嘩も何も起らないんだから、けれきもね、そんなに偉い貴方が、何故私なんぞから御金を借りる必要があるの。可笑しいぢやありませんか。いえ、揚足を取ると思ふと腹が立つでせう。左様なんぢやありません。それ程偉い貴方でも、御金がないと、私見た様なものに頭を下けなけりやならなくなる」

「だから、先きから頭を下げてゐるんです」

「また本氣で聞いてゐらつしやらないのね」

「是が私の本氣な所なんです」

「ぢや、それも貴方の偉い所かも知れない。然し誰も御金を貸し手がなくつて今の御友達を救つて上げる事が出来なかつたら何うなさる。いくら偉くつても

駄目ぢやありませんか。無能力な事は車屋と同じですもの」

代助は今迄嫂が是程適切な異見を自分に向つて加へ得やうとは思はなかつた。實に金の工面を思ひ立つてから、自分でも此弱點を冥々の裡に感じてゐたのである。

**印象** 一にも金、二にも金といった風に、實業家の妻らしい梅子の口物や態度がうかゞはれるではないか。

七

代助は默然として、自己は何の爲に此世の中に生れて來たかを考へるのは斯う云ふ時であつた。彼は今迄何遍も此大問題を構へて、彼の眼前に据え付けて見た。其動機は、單に哲學上の好奇心から來た事もあるし、又世間の現象が、

それから

代助は、平岡に金を都合して返す日限が來てなかつた。

そして三千代  
が言たにや  
来てはに返  
はせればな  
が平岡の金  
か返した方  
ぬのひと来  
頭を痛めて居

餘りに複雑な色彩を以て彼の頭を染付けやうと焦るから来る事もあるし、又最後には今日の如くアンニユイの結果として来る事もあるが、其都度彼は同じ結論に到着した。然し其結論は、此問題の解決ではなくつて寧ろ其否定と異ならなかつた。彼の考へによると、人間はある目的を以て生れたものではなかつた。之と反對に、生れた人間に、始めて、ある目的が出来て来るのであつた。最初から客觀的ある目的を拵へて、それを人間に附着するのは、其人間の自由な活動を、既に生れたる時に奪つたと同じ事になる。だから人間の目的は、生れた本人が本人自身に作つたものでなければならぬ。けれども、如何な本人でも之を隨意に作る事は出来ない。自己存在の目的は、自己存在の経過が、既にこれを天下に向つて發表したと同様だからである。

此根本義から出立した、代助は、自己本來の活動を、自己本來の目的として

ゐた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て歩いたり、考へたりするのは、歩行と思考の墜落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立て、活動するのは活動の墜落になる。従つて自己全體の活動を擧げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である。

だから、代助は今日迄、自分の腦裡に願望、嗜欲が起るたび毎に、是等の願望嗜欲を遂行するのを自己の目的として存在してゐた。二個の相容れざる願望嗜欲が胸に闘ふ場合も同じ事であつた。たゞ矛盾から出る一目的の消耗と解釋してゐた。これを煎じ詰めると、彼は普通に所謂無目的な行爲を目的として活動してゐたのである。さうして、他を偽らざる點に於てそれを尤も道德的なものと心得てゐた。

それから

此主義を出来る丈遂行する彼等は、其遂行の途中で、われ知らず、自分のと  
うに棄却した問題に襲はれて、自分は今何の爲に、こんな事をしてゐるかと思  
へ出す事がある。彼が番町を散歩しながら、何故散歩しつゝあるかと疑つたの  
は正に是である。

其時彼は自分ながら自分の活力に充實してゐない事に気がつく、餓えたる  
行動は、一氣に遂行する勇氣と興味に乏しいから、自ら其行動の意義を中途で  
疑ふ様になる、彼はこれをアンニユイと名けてゐる。アンニユイに罹る者、彼  
は論理の迷亂を引き起すものと信じてゐた。彼の行爲の中途に於て、何の爲と  
云ふ、冠履顛倒の疑ひを起させるのは、アンニユイに外ならなかつたからであ  
る。

印象 自分がぶら／＼して遊んで居ることに對して、じつと考へ込んで居

る彼の姿が眼につく。

八

「だつて、兄さんが留守勝で、嘸御淋しいでせうなんて、あんまり思ひ遣りが  
好過ぎる事を仰しやるからさ」と云ふ言葉があつた。代助は其處へ自分を挾ん  
だ。

「いや、彼の知つた女に左様云ふのが一人あつて、實は甚だ氣の毒だから、つ  
い他の女の心持も聞いて見たくなつて伺つたんで、決して冷かした積ぢやない  
んです」

「本當に？ 夫や一寸何てえ方なの」

「名前は云ひ悪いんです」

それから

代助が、實家の  
子が見た、彼の  
を、悪いて、顔  
が、見いて、色  
の、悪いて、色  
が、見いて、色  
の、悪いて、色  
の、悪いて、色

「ぢや、貴方が其旦那に忠告をして、奥さんをもつと可愛がるやうにして御上げなされば可いのに」

代助は微笑した。

「姉さんも、さう思ひますか」

「當り前ですわ」

「もし其夫が僕の忠告を聞かなかつたら、何うします」

「そりや何うも仕様がないわ」

「放つて置くんですか」

「放つて置かなけりや、何なさるの」

「ぢや、其細君は夫に對して細君の道を守る義務があるでせうか」

「大變に理責めなのね、夫や旦那の不親切の度合にも因るでせう」

「もし、其細君に好きな人があつたら何うです」

「知らないわ、馬鹿らしい。好きな人がある位なら、始めつから其方へ行つたら好いちやありませんか」

代助は黙つて考へた。しばらくしてから、姉さんと云つた。梅子は其深い調子に驚かされて、改めて代助の顔を見た。代助は同じ調子で猶云つた。

「僕は今度の縁談を断らうと思ふ」

代助の巻煙草を持った手が少し顫へた。梅子は寧ろ表情を失つた顔付をして謝絶の言葉を聞いた。代助は相手の様子に頓着なく進行した。

「僕、今迄結婚問題に就いて、貴方に何となく迷惑をかけた上に、今度も亦心配して貰つてゐる。僕ももう三十だから、貴方の云ふ通り、大抵な處で御勸め次第になつて好いのですが、少し考へがあるから、この縁談もまあ已めにし

それから

代助は三年前  
前千代が  
平岡の妻にな  
らぬ前にから  
三平代に戀し  
て居たのだと  
気が付いた  
らば、平岡さん

たい希望です。此間御父さんによく考へて見ろ云はれて、大分考へて見たが矢つ張り断る方が好い様だから断ります。實は今日は其用で御父さんに逢ひに来たんですが、今御客の様だから、序と云つては失禮だが、貴方にも御話をし  
て置きます」

梅子は代助の様子が眞面目なので、何時もの如く無駄口も入れずに聞いて居たが、聞き終つた時、始めて自分の意見を述べた。それが極めて簡単な且極めて實際的な短い句であつた。

「でも御父さんは屹度御困りですよ」

「お父さんには僕が直に話すから構ひません」

「でも話がある此處迄進んでゐるんだから」

「話が何所迄進んでゐると、僕はまだ貰ひますと云つた事はありません」

「けれども判然貰はないとも仰しやらなかつたでせう」

「それを今云ひに来た所です」

代助と梅子は向ひ合つたなり、しばらく黙つた。

印象 さうしても三平代のことと思ひ切れず、いら／＼した彼の心持が覗かれるではないか。

### 九

「あの時兄さんが亡くならないで未だ達者でゐたら、今頃私は何うしてゐるでせう」と三平代は、其時を戀しがる様に云つた。

「兄さんが達者でゐたら、別の人になつて居る譯ですか」

「別な人にはなりませんわ。貴方は？」

それから

を妻に貰つて、  
 くれで頼まれて  
 たのんで捨てたの  
 のに仲介の平  
 岡にあつたが、  
 労働心にはい  
 であつたが、  
 併し三千代は  
 忘れぬ心で、  
 出来ぬまで、  
 今日まで居た  
 で暮して居た  
 のだつて、  
 その姿を東京に  
 の姿を東京に  
 見ると、  
 つて、  
 の心は動かし  
 出た。

「僕も同じ事です」

三千代は其時、少し窘める様な調子で、

「あら嘘」と云つた。代助は深く眼を三千代の目に据えて、

「僕は、あの時と今も、少しも違つてゐやしないのです」と答へた儘、猶ししばらくは眼を相手から離さなかつた。三千代は忽ち視線を外らした。さうして、半獨り言の様に、

「だつて、あの時から、もう違つてゐらしつたんですもの」と云つた。

三千代の言葉は普通の談話としては餘りに聲が低過ぎた。代助は消えて行く影を踏まへる如くに其尻を挿へた。

「違やしません。貴方にはたゞ左様見える丈です。左様見えなつて仕方がないが、それは僻目だ」

代助の方は通例よりも熱心に、判明した聲で自己を辯護する如くに云つた。  
 三千代の聲は益々低かつた。

「僻目でも何でも可くつてよ」

代助は黙つて三千代の様子を窺つた。三千代は始めから眼を伏せてゐた。代助には其長い睫毛の顫へる様子が能く見えた。

「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。僕はそれ丈の事を貴方に話したい爲にわざ／＼貴方と呼んだのです」

代助の言葉には、普通の愛人の用ひる様な甘い文彩を含んでゐなかつた。彼の調子は其言葉と共に、簡單で素朴であつた。寧ろ嚴肅の域に逼つてゐた。唯夫丈の事を語る爲に急用としてわざ／＼三千代と呼んだ所が、玩具の詩歌に類してゐたけれども、三千代は固より、斯う云ふ意味での俗を離れた急用を理解  
 それから

し得る女であつた。其上世間の小説に出て来る青春時代の修辭には、多くの興味を持つてゐなかつた。代助の言葉が、三千代の官能に華やかな何物をも與へなかつたのは、事實であつた。三千代がそれに渴してゐなかつたのも事實であつた。代助の言葉は官能を通り越して、すぐ三千代の心に達した。三千代は顫ふる睫毛の間から、涙を頬の上に流した。

「僕はそれを貴方に承知して貰ひたいのです。承知して下さい」

三千代は猶泣いた。代助に返事をする所でなかつた。袂から半帛を出して顔へ當てた、濃い眉の一部分と、額と生際丈が代助の眼に残つた。代助は椅子を三千代の方へ摺寄せた。

「承知して下さいさうと耳の傍で云つた。三千代は、まだ顔を蔽つてゐた。しやくり上げながら、

「餘りだわ」云ふ聲が半帛の中で聞えた。それが代助の聴覚を電流の如くに冒した。代助は自分の告白が遅過ぎたと云ふ事を切に自覺した。打ち明けるならば、三千代が平岡へ嫁ぐ前に打ち明ければならない筈であつて。彼は涙と涙の間をほつ／＼綴る、三千代の此の一語を聞くに堪へなかつた。

僕は三四年前に、貴方に左様打ち明ければならなかつたのです」と云つて無然として口を閉ぢた。三千代は急に半帛を顔から離した。臉の赤くなつた眼を突然代助の上に睜つて、

「打明けて下さらなくつても可いから、何故」と云ひ掛けて、一寸躊躇したが思ひ切つて、「何故棄て、仕舞つたんです」と云ふや否や、又半帛を顔に當て、又泣いた。

「僕が悪い。堪忍して下さい」

それから



三六  
代助は三千代の手頸を執つて、半帛を顔から離さうとした。三千代は逆らはずともしなかつた。半帛は膝の上に着いた。三千代は其膝の上を見た儘、微かな聲で、

「残酔だわ」と云つた。小さい口元の肉が顫ふ様に動いた。

「残酷と云れても仕方がありません。其代り僕に夫丈の罰を受けてゐます」  
三千代は不思議な眼をして顔を上げたが、

「何うして」と聞いた。

「貴方が結婚して三年以上になるが、僕はまだ獨身でゐます」

「だつて、夫れは貴方の御勝手ぢやありませんか」

「勝手ぢやありません。貰はうと思つても貰へないのです。それから以後、宅のものから何遍結婚を勧められたか分りません。けれどもみんな斷つて仕舞ひ

ました。今度も亦一人斷りました。其結果僕と僕の父との間が何うなるか分りません。然し何うなつても構はない、斷るんです。貴方が僕に復讐してゐる間は斷らなければなりません」

「復讐」と三千代は云つた。此二字を恐るゝものゝ如くに眼を働かした。「私は是でも、嫁に行つてから今日迄、一日も早く貴方が御結婚なされば可いと、思はないで暮らした事はありません」と稍改まつた物の言ひ振であつた。

印象 切々自分のこれまでの心の惱を、それとなく打ち明けやうとして居る、彼の態度が見られる。

「其後貴方と平岡との關係は別に變りはありませんか」

それから

中をあらはに  
打ち明けやう  
たかして居  
たが、打明居  
けられ、今日  
た。彼は今日  
こそは、三日  
千代を自分の  
家に招んで、  
思ひ切つて、  
たを打ち明  
け心を

三千代は此間を受けた時でも、依然として幸福であつた。

「あつたつて構はないわ」

「貴方は夫れ程僕を信用してゐるんですか」

「信用してゐなくつちや、斯うして居られないぢやありませんか」

代助は目映しさうに、熱い鏡の様な遠い空を眺めた。

「僕には夫程信用される資格がなさうだ」と苦笑しながら答へたが、頭の中は焙爐の如く火照つてゐた。然し三千代は氣にも掛けなかつたと見えて、何故とも聞き返さなかつた。たゞ簡単に、

「まあ」とわざとらしく驚いて見せた。代助は眞面目になつた。

「僕は白状するが、實を云ふと、平岡君より頼にならない男なんです。買ひ被つてゐられると困るから、みんな話して仕舞ふが」と前置をして、夫から自

分と父との今日迄の關係を詳しく述べた上、

「僕の身分は是から先何うなるか分らない。少くとも當分は一人前ぢやない。半人前にもなれない。だから」と云ひ淀んだ。

「だから、何うなさるんです」

「だから、僕の思ふ通り、貴方に對して責任が盡せないだらうと心配してゐるんです」

「責任つて、何んな責任なの。もつと判然仰しやらなくつちや解らないわ」

代助は平生から物質的状況に重きを置くの結果、たゞ貧苦が愛人の満足に償しないと云ふ事を知つてゐた。だから富が三千代に對する責任の一つと考へたのみで、夫より外に明かな觀念は丸で持つてゐなかつた。

「徳義上の責任ぢやない、物質上の責任です」

それから

「そんなものは欲しくないわ」

「欲しくないと言つたつて、是非必要になるんです。是から先僕が貴方と何んな新しい關係に移つて行くにしても物質上の供給が半分は解決者ですよ」

「解決者でも何でも、今更左様な事を氣にしたつて仕方がないわ」

「口ではさうも云へるが、いざと云ふ場合になると困るのは眼に見えてるます」

三千代は少し色を變へた。

「今貴方の御父様の御話を伺つて見ると、斯うなるのは始めから解つてるぢやありませんか。貴方だつて、其位な事は疾から氣が付いて入らつしやる筈だと思ひますわ」

代助は返事が出来なかつた。頭を抑へて

「少し腦が何うかしてゐるんだ」  
と獨り言の様に云つた。三千代は少し涙ぐんだ。

「もし夫が氣になるなら、私の方は何うでも宜う御座んすから、御父様と仲直りをなすつて、今迄通り御交際になつたら好いちやありませんか」

代助は急に三千代の手頸を握つて、それを振る様に力を入れて云つた。

「そんな事を爲る氣なら始めから心配をしやしない。たゞ氣の毒だから貴方に詫まるんです」

「詫まるなんて」と三千代は聲を顫はしながら遮つた。「私が原因で左様なつたのに、貴方に詫まらしちや濟まないぢやありませんか」

三千代は聲を立てゝ泣いた。代助は慰撫める様に、

「ぢや我慢しますか」と聞いた。

それから

「我慢はしません。當り前ですもの」

「是から先まだ變化がありますよ」

「ある事は承知してゐます。何んな變化があつたつて構やしません、——此間から私は、若もの事があれば、死ぬ積で覺悟を極めてゐるんですもの」

代助は慄然として戰いた。

「貴方には是から先何うしたら好いと云ふ希望はありませんか」と聞いた。

「希望なんか無いわ、何でも貴方の云ふ通りになるわ」

「漂泊——」

「漂泊でも好いわ。死ぬと仰しやれば死ぬわ」

代助は又竦とした。

「此儘では」

「此儘でも構はないわ」

「平岡君は全く氣が付いてゐない様ですか」

「氣が付いてゐるかも知れません。けれども私もう度胸を据ゑてゐるから大丈夫なのよ。だつて何時殺されたつて好いんですもの」

「さう死ぬの殺されるのと安つほく云ふものぢやない」

「だつて、放つて置いたつて、永く生きられる身體ぢやないぢやありませんか」

代助は硬くなつて、竦むが如く三千代を見詰めた。三千代は歇私的里の發作に襲はれた様に思ひ切つて泣いた。

一仕切經つと發作は次第に收まつた。後は例の通り靜かな、しとやかな、奥行のある、美しい女になつた。眉のあたりが殊に晴れくしく見えた。其時代

それから

代助は、平岡  
を呼んで、平岡  
分の三千代に  
對するこれに

助は、

「僕が自分で平岡君に逢つて解決を付けても宜う御座んすか」と聞いた。

「そんな事が出来て」三千代は驚いた様であつた。代助は、

「出来る積です」と確り答へた。

「ちや、何うでも」三千代が云つた。  
印象 女は、一度斯うときめるに、男以上の強さを見せるものだ。三千代  
にもそれが見えるぢやないか。

二

「よく分りました」三千代は簡明に答へた。

「貴様は馬鹿だ」と兄が大きな聲を出した。代助は俯向いた儘顔を上げなかつ

た。

「愚圖だ」と兄が又云つた。

「不斷は人並以上に減らす口を敲く癖に、いざと云ふ場合には、丸で啞の様に  
黙つてゐる。さうして、蔭で親の名譽に關する様な悪戯をしてゐる。今日迄何  
の爲に教育を受けたのだ」

兄は洋卓の上の取紙を取つて自分で巻き始めた。靜かな部屋の中に、半切の  
音がかさく鳴つた。兄はそれを元の如くに封筒に納めて懐中した。

「ぢや歸るよ」と今度は普通の調子で云つた。代助は叮嚀に挨拶をした。兄は  
「おれも、もう逢はんから」と云ひ捨て、玄關に出た。

兄の去つた後、代助はしばらく元の儘じつと動かすにゐた。門野が茶器を取  
り片付けに來た時、急に立ち上がった。

それから

で、の心を語つ  
て、三千代を  
呉れ、平岡と  
た、平岡君は  
遣、平岡君は  
病、平岡君は  
が、平岡君は  
う、平岡君は  
以上、平岡君  
絶、平岡君は  
代、平岡君は  
て、平岡君は  
云、平岡君は  
た、平岡君は  
こ、平岡君は  
さ、平岡君は  
め、平岡君は  
父、平岡君は  
父、平岡君は  
助、平岡君は  
許、平岡君は  
の、平岡君は

宗助は、座敷に、雑沓を履き、居て、お天てれが、お米に、お投や見、好出、お天てれが、お米に、お投や見、云、お天てれが、お米に、お投や見、は、お天てれが、お米に、お投や見、いつ、お天てれが、お米に、お投や見、が、お天てれが、お米に、お投や見、生、お天てれが、お米に、お投や見、返、お天てれが、お米に、お投や見、つ、お天てれが、お米に、お投や見、戻、お天てれが、お米に、お投や見、つ、お天てれが、お米に、お投や見、手、お天てれが、お米に、お投や見、紙、お天てれが、お米に、お投や見、機、お天てれが、お米に、お投や見、を、お天てれが、お米に、お投や見、書、お天てれが、お米に、お投や見、向、お天てれが、お米に、お投や見、に、お天てれが、お米に、お投や見、な、お天てれが、お米に、お投や見、

「門野さん。僕は一寸職業を探して来る」と云ふや否や、烏打帽を被つて、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。  
代助は暑い中を馳けない許に、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から真直に射下した。乾いた埃が、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はちりくくこ焦げる心持がした。

印象 父兄にすてられても、彼の心は兎に角く満たされたのだ。斯うなつてはもう働かずに居られないだらう。

四門

宗助は銀金具の付いた机の抽出を開けて頻に中を検べ出した。一本書いて封をして、一寸考んたが、

「おい、佐伯のうちは中六番町何番地だつたかね」と襖越に細君に聞いた。

「二十五番地ぢやなくつて」と細君は答へたが、宗助が名宛を書き終る頃になつて、

「手紙ぢや駄目よ。行つて能く話をして来なくつちや」と付け加へた。

「まあ、駄目迄も手紙を一本出して置かう。夫で不可なかつたら出掛けるとするさ」と云ひ切つたが、細君が返事をしないので「ねえ、おい、夫で好いだら

き出した。

う」と念を押した。

1110

細君は悪いとも云ひ兼ねたと見えて、其上争ひもしなかつた。宗助は郵便を持つた儘座敷から直玄關に出た。細君は夫の足音を聞いて、始めて座を立つたが、是は茶の間の椽傳ひに玄關に出た。

「一寸散歩に行つて来るよ」

「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた。

三十分許して格子ががらりと開いたので、お米は又裁縫の手を已めて、椽傳ひに玄關へ出て見ると、歸つたと思ふ宗助の代りに、高等學校の制帽を被つた弟の小六が這入つて來た。袴が五六寸しか出ない位の、長い黒羅紗のマントの釦を外しながら、

「暑い」と云つてゐる。

「だつて餘まりだわ。此御天氣にそんな厚いものを着て出るなんて」

「何、日が暮れたら寒いだろうと思つて」と小六は云ひ譯を半分しながら、嫂の後に跟いて、茶の間へ通つたが、縫ひ掛けてある着物へ眼を着けて、

「相變らず精が出ますね」云つたなり、長火鉢の前へ胡坐をかいた。嫂は裁縫を隅の方へ押し遣つて置いて、小六の向へ來て、一寸鐵瓶を卸して炭を繼ぎ始めた。

「御茶なら澤山です」と小六が云つた。「厭？」と女學生風に念を押してお米は

「ちや御菓子は」と云つて笑ひかけた。

「有るんですか」と小六が聞いた。

「いゝえ、無いの」と正直に答へたが、思ひ出した様に、「待つて頂戴、有るかもしれないわ」と云ひながら立ち上がる拍子に、横にあつた炭取を取り退けて

門

1111

袋戸棚を開けた。小六はお米の後姿の、羽織が帯で高くなつた邊を眺めてゐた。何を探すのだから、中々手間が取れさうなので、

「ぢや御菓子も廢しにしませう。それよりか今日は兄さんは何うしました」と聞いた。

「兄さんは今一寸」と後向の儘答へてお米は矢張り戸棚の中を探してゐる。やがてはたりと戸を締めて、

「駄目よ、何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」と云ひながら、又火鉢の向へ歸つて來た。

「ぢや晩に何か御馳走なさい」

「えゝ爲てよ」と柱時計を見ると、もう四時近くであるお米は「四時、五時、六時」と時間を勘定した。小六は黙つて嫂の顔を見てゐた。彼は實際嫂の御馳

走には餘り興味を持ち得なかつたのである。

「姉さん、兄さんは佐伯へ行つて呉れたんですかね」と聞いた。

「此間から行く行つてる事は云つてるのよ。だけご兄さんも朝出て夕方に歸るんでせう。歸ると草臥れちまつて、御湯に行くのも太儀さうなものですもの。だからさう責めるのも實際御氣の毒よ」

「そりや兄さんも忙しいには違なからうけれども、僕もあれが極まらないと氣掛りで落ちついて勉強も出来ないんだから」と云ひながら、小六は眞鍮の火箸を取つて、火鉢の灰の中へ何かしきりに書き出した。お米は其動く火箸の先を見てゐた。

「だから先刻手紙を出して置いたのよ」と慰める様に云つた。  
「何て」



「そりやもつて見なかつたの。けれども屹度あの相談よ。今に兄さんが歸つて來たら聞いて御覽なさい。屹度左様よ」

「もし手紙を出したのなら、共用には違ないでせう」

「え、本當に出したのよ。今兄さんが其手紙を持つて、出しに行つた所なの」

小六はこれ以上辯解の様な慰藉の様な、嫂の言葉に耳を借したくなかつた。散歩に出る閑があるなら手紙の代りに自分で足を運んで呉れたらよさうなものだと思ふと、餘り好い心持でもなかつた。座敷へ来て、書棚の中から赤い表紙の洋書を出した、方々頁を剝つて見てゐた。

**印象** 因循して居る宗助や、てきばきしたお米や、いらくして居る小六の氣分が覗はれる。

「已見た様な腰辨は、殺されちや厭だが、伊藤さん見た様な人は、哈爾賓へ行つて殺される方が可いんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。

「あら、何故」

「何故つて伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。たゞ死んで御覽、斯うは行かないよ」

「成程そんなものかも知れないな」小六は少し感服した様だつたが、やがて

「兎に角滿洲だの、哈爾賓だのつて物騒な處ですね、僕は何だか危険な様な心持がしてならない」と云つた。

「夫や、色んな人が落合つてるからね」

宗助は、散歩  
の戻りに、おも  
ちのつて、磨を  
買つて、來た  
弟の居る、伊藤  
て居た、伊藤  
公の居る、伊藤  
詩公の居る、伊藤

此時お米は妙な顔をして、斯う答へた夫の顔を見た。宗助もそれに気が付いたらしう。

三六

「さあ、もう御膳を下けたら好からう」と細君を促して、先刻の達磨を又臺の上から取つて、人指指の先へ載せながら、

「ごうも妙だよ。よく斯う調子よく出来るものだと思つてね」と云つた。

臺所から清が出て来て、食ひ散らした皿小鉢を食卓ごと引いて行つた後で、お米も茶を入れ替へるために、次の間へ立つたから、兄弟は差向ひになつた。「あゝ綺麗になつた。何うも食つた後は汚ないものでね」と宗助は全く食卓に未練のない顔をした。勝手の方で清がしきりに笑つてゐる。

「何がそんなに可笑しいの、清」とお米が障子越しに話し掛ける聲が聞えた。清はへえと云つて猶笑ひ出した。兄弟は何にも云はず、半下女の笑ひ聲に耳を傾

けてゐた。

しばらくして、お米が菓子皿と茶盆を兩手に持つて、又出て來た。藤蔓の着いた大きな急須から、胃にも頭にも應へない番茶を湯呑程な大きな茶碗に注いで、兩人の前へ置いた。

「何だつて、あんなに笑ふんだい」夫が聞いた。けれどもお米の顔は見ずに、却て菓子皿の中を覗いてゐた。

「貴方があんな玩具を買つて來て、面白さうに指の先へ乗せて入らつしやるからよ。子供のない癖に」

宗助は意にも留めない様に軽く「さうか」と云つたが、後から緩くり、

「是でも、元は子供が有つたんだがね」と、さも自分の言葉を味はつてゐる風に付け足して、生溜い眼を舉げて細君を見た。お米はびたりと黙つて仕舞つた。

門

三七

「あなた御菓子食べなくつて」ミ、しばらくしてから小六の方へ向いて話し掛けたが、

「え、食べます」と云ふ小六の返事を聞き流して、つゝと茶の間へ立つた。兄弟は又差向ひになつた。

電車の終點から歩くと二十分近くも掛る山の手の奥丈あつて、まだ宵の口だけれども、四隣は存外静かである。時々表を通る薄齒の下駄の響が訝へて、夜寒が次第に増して来る。宗助は懐手をして、

「晝間は暖たかいが、夜になると急に寒くなるね。寄宿ぢやもう蒸氣を通してゐるかい」と聞いた。

「いゝえ、まだです。學校ぢや餘つ程寒くならなくつちや、蒸氣なんか焚きやしません」

「さうかい。夫ぢや寒いだらう」

「えゝ。然し寒い位何うでも構はない積ですが」と云つた儘、小六はすこし云ひ淀んでゐるが、仕舞にとう／＼思ひ切つて、

「兄さん、佐伯の方は一體どうなるんでせう。先刻姉さんから聞いたら、今日手紙を出して下すつたさうですが」

「あゝ出した。二三日中に何とか云つて来るだらう。其上で又己が行くとも何うとも仕様よ」

小六は兄の平氣な態度を、心の中では飽き足らず眺めた。然し宗助の様子に何處と云つて、他を激させる様な鋭い所も、自らを庇護ふ様な卑しい點もないので、喰つて掛る勇氣は更に出なかつた。たゞ、

「ぢや今迄あの儘にしてあつたんですか」と單に事實を確めた。

「うん、實に濟まないがあの儘だ。手紙も今日やつとの事で書いた位だ。何うも仕方がないよ。近頃神経衰弱でね」と眞面目に云ふ。小六は苦笑した。

「もし駄目なら、僕は學校を已めて、一層今のうち満洲か朝鮮へでも行かうかと思つてゐるんです」

「満洲か朝鮮？　ひどく又思ひ切つたもんだね。だつて、お前先烈満洲は物騒で厭だつて云つたぢやないか」

用談はこんな處に往つたり來たりして遂に要領を得なかつた。仕舞に宗助が「まあ、好いや。さう心配しないで、何うかなるよ何しろ返事の來次第、已がすぐ知らせてやる。其上で又相談するとしやう」と云つたので、談話に區切が付いた。

小六が歸りがけに茶の間を覗いたら、お米は何にもせず、長火鉢に倚り掛

かつてゐた。「姉さん、左様なら」と聲を掛けたら、「おや御歸り」と云ひながら漸く立つて來た。

印象 今に何とかなるだらう——と、頼りのない事を頼りにして居る宗助の心持が覗かれる。

三

「お米、己は齒の性が餘程悪いと見えるね。斯うやると大抵動かぜ」と下齒を指で動かして見せた。お米は笑ひながら

「もうお年の所爲よ」と云つて白い襟を後へ廻して襯衣へ着けた。

宗助は其の日の午後とうとう思ひ切つて、齒醫者へ寄つたのである。應接間へ通ると、大きな洋卓の周圍に天鷲絨で張つた腰掛が並んでゐて、待ち合して

宗助の留守へ  
佐伯の叔母が  
訪ねて來たが  
叔母は、月島  
之助が、出た  
の工場へ、つ  
やうになつた  
こまや、今度  
石油發動機を  
いふものを

艦船に搭け付  
ける話などが  
したことが小  
六のこぼれ中  
々云ひ出さ  
すその儘歸  
つてしまつ  
た。この日、宗  
助は、役所の歸  
りに、商會  
へ寄つた。

二二二  
ゐる三四人が、うづくまる様に腮を襟に埋めてゐた。それが皆女であつた。綺麗な茶色の瓦斯暖爐には火がまだ焚いてなかつた。宗助は大きな姿見に映る白壁の色を斜に見て、番の來るのを待つてゐたが、あまり退屈になつたので、洋卓の上に重ねてあつた雑誌に眼を着けた。一二冊手に取つて見ると、いづれも婦人用のものであつた。宗助は其口繪に出てゐる女の寫眞を、何枚も繰返して眺めた。夫から「成効」と云ふ雑誌を取り上げた。其初めに、成効の秘訣といふ様なものが箇條書にしてあつたうちに、何んでも猛進しなくつては不可ないと云ふ一箇條と、たゞ猛進しても不可ない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくつてはならないと云ふ一箇條を讀んで、それなり雑誌を伏せた。「成効」と宗助は非常に縁の遠いものであつた。宗助は斯ういふ名の雑誌があるに云ふ事さへ、今日迄知らなかつた。それで又珍らしくなつて、一旦伏せたのを又開け

て見ると、不圖假名の交らない四角な字が二行程並んでゐた。夫には風碧落を吹いて浮雲盡き、月東山に上つて玉一團とあつた。宗助は詩とか歌とかいふものには、元から餘り興味を持たない男であつたが、どう云ふ譯か此二句を讀んだ時に大變感心した。對句が旨く出來たさか何とか云ふ意味ではなくつて、斯んな景色と同じ様な心持になれたら、人間も嘸嬉しからうと、ひよつと心が動いたのである。宗助は好奇心から此句の前に付いてゐる論文を讀んで見た。然し夫は丸で無關係の様に思はれた。只此二句が雑誌を置いた後でも、しきりに彼の頭の中を徘徊して。彼の生活は實際此四五年來、斯ういふ景色に出逢つた事がなかつたのである。

其時向ふの戸が開いて、紙片を持った書生が野中さんと宗助を手術室へ呼び入れた。

中へ這入ると、其處は應接間よりは倍も廣かつた。光線が成るべく餘計取れる様に明かるく拵へた部屋の二側に、手術用の椅子を四臺程据ゑて、白い胸掛をかけた受持男が、一人づつ別々に療治をしてゐた。宗助は一番奥の方にある一脚に案内されて、是へと云はれるので、踏段の様なものゝ上へ乗つて、椅子へ腰を卸した。書生が厚い縮入の前掛で丁寧に膝から下を包んで呉れた。

斯う穏やかに寝かされた時、宗助は例の齒が左程苦になる程痛んでゐないと云ふ事を發見した。夫ばかりか、肩も背も、腰の周りも、心安く落ち付いて、如何にも樂に調子が取れてゐる事に氣が付いた。彼はたゞ仰向いて天井から下つてゐる瓦斯管を眺めた。さうして此構へと設備では、歸りがけに思つたより高い療治代を取られるかも知れないと氣遣つた。

所へ顔の割に頭の薄くなり過ぎた肥つた男が出て来て、大變丁寧に挨拶をし

たので、宗助は少し椅子の上で狼狽た様に首を動かした。肥つた男は一應容體を聞いて、口中を検査して、宗助の痛いと言ふ齒を一寸拵つて見たが、

「何うも斯う弛みますと、到底元の様に緊る譯には参りますまいと思ひますが。何しろ中がエソになつて居りますから」と云つた。

宗助は此宣告を淋しい秋の光の様に感じた、もうそんな年なんでせうかと聞いて見たくなつたが、少し極りが悪いのでたゞ、

「ぢや癒らないんですか」と念を押した。肥つた男は笑ひながら斯う云つた。

「まあ癒らないと申し上げるより外に仕方が御座んせん。已を得なければ、思ひ切つて抜いて仕舞ふんですが、今の所では、まだ夫程でも御座いますまいから、たゞお痛み文を留めて置ませう。何しろエソ——エソと申しても御分りにならないかも知れませんが、中が丸で腐つて居ります」

宗助は、左うですかと云つて、たゞ肥つた男のなすが儘にして置いた。すると彼は器械をぐる／＼廻して、宗助の齒の根へ穴を開け始めた。而して其中へ細長い針の様なものを刺し通しては、其先を嗅いでゐたが、仕舞に糸程な筋を引き出して、神経が是丈取れましたと云ひながら、それを宗助に見せて呉れたそれから薬で其穴を埋めて、明日入らつしやいと注意を與へた。

椅子を下りるとき、身體が真直になつたので、視線の位置が天井から不圖庭先に移つたら、其處にあつた高さ五尺もあらうと云ふ大きな鉢栽の松が宗助の眼に這入つた。其根方の所を、草鞋かけの植木屋が丁寧に菰で包んでゐた、段段露が凝つて霜になる時節なので、餘裕のあるものは、もう今時分から手廻しをするのだと氣が付いた。

歸りがけに玄關脇の薬局で、粉薬の儘含嗽劑を受取つて、それを百倍の微温

湯に溶解して、一日十數回使用すべき注意を受けた時、宗助は會計の請求した治療の代が案外廉なるのに喜んだ。是ならば向ふで云ふ通り四五回通つた所がさして困難でもないと思つて、靴を穿かうとすると、今度は靴の底が何時の間にか破れてゐる事に氣が付いた。

印象 靴の底が何時の間にか破れてゐる——腰辨官吏の悲哀が、しみる／＼と思はせられるではないか。

四

其晩夫婦は火鉢に掛けた鐵瓶を、雙方から手で掩ふ様にして差し向つた。「何うですな世の中は」と宗助が例にない浮いた調子を出した。お米の頭の中には、夫婦にならない前の宗助と自分の姿が綺麗に浮んだ。

門

小六は、一時間  
下宿を引越した  
つて、宗助の  
家に移ることに  
なつた。お米  
は小六の室

室にあてて掃除すると  
居室の時宗の色が  
はお米の顔に  
の悪いたの顔  
がつかぬに  
顔色が悪い  
うだか悪  
いたお米  
さいは役  
宗助は所  
居ては  
のこも  
かなつた  
かおつた  
出た  
ない  
た

「ちつと、面白くしやうぢやないか。此頃は如何にも不景氣だよ」宗助が又云つた。二人は夫から今度の日曜には一所に何處へ行かうか、此處へ行かうかとしばらく夫許話し合つてゐた。夫から二人の春着の事が題目になつた。宗助の同僚の高木と云ふ男が、細君がそりや非道い、實際寒くなつても着て出るものがないんだと辯解するので、寒ければ已を得ない。夜具を着るとか、毛布を被るとかして、當分我慢しろと云つた話を、宗助は可笑しく繰返してお米を笑はした。お米は夫の此様子を見て、昔が眼の前に戻つた様な気がした。

「高木の細君は夜具でも構はないが、おれは一つ新しい外套を拵へたいな。此間齒醫者へ行つたら、植木屋が菰で盆栽の松の根を包んでゐたので、つくづく左う思つた」

「外套が欲しいつて」

三六

「あゝ」

お米は夫の顔を見て、さも氣の毒だと云ふ風に、

「御拵へなさいな。月賦で」と云つた。宗助は、

「まあ止さうよ」と急に佻しく答へた。さうして「時に小六は何時から来る氣なんだらう」と聞いた。

「来るのは厭なんぞせう」とお米が答へた。お米には自分が初めから小六に嫌はれてゐると云ふ自覺があつた。それでも夫の弟だと思ふので、成べくは反を合せて、少しでも近づける様に、と、今日迄仕向けて来た。その爲か今では以前と違つて、まあ普通の小舅位の親しみはあると信じてゐる様なもの、斯んな場合になると、つい實際以上に氣を回して、自分丈が小六の來ない唯一の原因の様に考へられるのであつた。

門

三六



「そりや下宿からこんな處へ移るのは好かないだろうよ。丁度此方が迷惑を感ずる通り、向ふでも窮屈を感ずる譯だから、おれだつて小六が来ないとすれば、今のうち思ひ切つて外套を作る丈の勇氣があるんだけれども」

宗助は男丈けに思ひ切つて斯う云つて仕舞つた。けれども是丈ではお米の心を盡してゐなかつた。お米は返事もせず、しばらく黙つてゐたが、細い頸を襟の中へ埋めた儘、上眼を使つて、

「小六さんは、まだ私の事を悪んでゐらつしやるのでせうか」と聞き出した。宗助が東京へ来た當座は、時々是に類似の質問をお米から受けて、其都度慰めるのは大分骨の折れた事もあつたが、近來は全く忘れた様に何も云はなくなつたので、宗助もつい氣に留めなかつたのである。

「又ヒステリーが始まつたね。好いぢやないか、小六なんぞが何う思つたつて

己さへ付いてれば)

(論語にさう書いてあつて)

お米は斯んな時に、斯ういふ冗談を云ふ女であつた。宗助は、

「うん、書いてある」と答へた。夫で二人の會話が仕舞になつた。

翌日宗助が眼を覺ますと、亞鉛張の庇の上で寒い音がした。お米が襦袢の儘枕元へ来て

「さあ、もう時間よ」を注意したとき、彼は此黙滴の音を聞きながら、もう少し暖かい蒲團の中に温もつてゐたかつた。けれども血色の可くないお米の、甲斐々々しい姿を見るや否や、

「おい」を云つて直起き上つた。

外は濃い雨に鎖されてゐた。崖の上の孟宗竹が、時々蠶を振ふ様に雨を吹

いて動いた。此佗びしい空の下へ濡れに出る宗助に取つて、力になるものは、暖かい味噌汁と暖かい飯より外になかつた。

「又靴の中が濡れる。何うしても二足持つてゐないと困る」と云つて、底に小さい穴のあるのを仕方なしに穿いて、洋袴の裾を一寸許まくり上げた。

午過に歸つて来て見るに、お米は金盥の中に雑巾を浸けて、六疊の鏡臺の傍に置いてゐた。其上の所丈天井の色が變つて。時々雫が落ちて来た。

「靴ばかりぢやない。家の中迄濡れるんだね」と云つて宗助は苦笑した。お米は其晩夫の爲に置炬燵へ火を入れてスコツチの靴下と縞羅紗の洋袴を乾かした

明る日も亦同じ様に雨が降つた。夫婦も亦同じ事を繰返した。其明る日もまだ晴れなかつた。三日目の朝になつて、宗助は眉を縮めて舌打をした。

「何時迄降る氣なんだ。靴がじめくして我慢にも穿けやしな」

「六疊だつて困るわ、あゝ漏つちや」

夫婦は相談して、雨が晴れ次第、屋根を繕つて貰ふ様に家主へ掛け合ふ事にした。けれども靴の方は何とも仕様がなかつた。宗助はきしんで這入らないのを無理に穿いて出て行つた。

印象 こゝでも腰辨官吏の悲哀さと、その家庭の淋しさが、さまざま眼に見せつけられる。

五

「清かい」とお米が聲を掛けた。

清は夫からすぐ起きた。三十分程経つてお米も起きた。又三十分程経つて宗助も遂に起きた。平常は好い時分にお米が遣つて来て、

坂井の家が  
だなご、話  
して、寝に  
た晩、夜更  
がから、物  
がした。お  
米音



なる位茂つて来る。始めて越した年は、宗助もお米も此景色を見て驚かされた位である。此秋海棠は杉垣のまだ引抜かれない前から、何年となく地下に蔓つてゐたもので、古家の取り毀たれた今でも、時節が来ると昔の通り芽を吹くものと解つた時、お米は、

「でも可愛いわね」と喜んだ。

宗助が霜を踏んで、此記念の多い横手へ出た時、彼の眼は細長い路次の一點に落ちた。さうして彼は日の通はない寒さの中にはたと留まつた。

彼の足元には黒塗の蒔繪の手文庫が放り出してあつた。中味はわざ／＼其處へ持つて来て置いて行つた様に、霜の上になやんと据つてゐるが蓋は二三尺離れて、堀の根に打ち付けられた如くに引つ繰り返つて、中を張つた千代紙の模様判然見えた。文庫の中から洩れた手紙や書付類が、其處いらに遠慮なく散

らばつてゐる中に、比較的長い一通が、わざ／＼二尺許廣けられて、其先が紙屑の如く丸めてあつた。宗助は近付いて、此揉苦茶になつた紙の下を覗いて覺えず苦笑した。下には大便が垂れてあつた。

土の上に散らばつてゐる書類を一纏めにして、文庫の中へ入れて、霜と泥に汚れた儘宗助は勝手口迄持つて来た。腰障子を開けて、清に

「おい是を一寸其處へ置いて呉れ」と渡すと、清は妙な顔をして、不思議さうにそれを受取つた。お米は奥で座敷へ拂塵を掛けてゐた。宗助はそれから懐手をして、玄關だの門の邊を能く見廻つたが、何處にも平常と異なる點は認められなかつた。

宗助は漸く家へ入つた。茶の間へ来て例の通り火鉢の前へ坐つたが、すぐ大きな聲を出してお米を呼んだ。お米は、

「起き抜けに何處へ行つて入らしたの」云ひながら奥から出で来た。

「おい昨夜枕元で大きな音がしたのは、矢張夢ぢやなかつたんだ。泥棒だよ。泥棒が坂井さんの崖の上から宅の庭へ飛び下りた音だ。今裏へ廻つて見たら、此文庫が落ちてゐて中に這入つた手紙なんぞが、無茶苦茶に放り出してあつたお負に御馳走迄置いて行つた」

宗助は文庫の中から、二三通の手紙を出してお米に見せた。それには皆坂井の名宛が書いてあつた。お米は喫驚して立膝の儘、

「坂井さんぢや外に何か取られたでしようか」と聞いた。宗助は腕組をして、「ことに因ると、まだ何か遣られたね」と答へた。

夫婦は兎も角もと云ふので、文庫を其處に置いたなり朝飯の膳に着いた。然し箸を動かす間も泥棒の話は忘れなかつた。お米は自分の耳と頭の髓な事を夫

に誇つた。宗助は耳と頭の髓でない事を幸福とした。

「さう仰しやるけれど、是が坂井さんでなくつて、宅で御覽なさい。貴方見た様に、ぐうぐう寝て入らしたたら困る」

「なに、宅なんぞへ這入る氣遣はないから大丈夫だ」と宗助も口の減らない返事をした。

其處へ清が突然臺所から顔を出して、

「此間拵へた旦那様の外套でも取られ様ものなら、夫こそ騒ぎで御座いましたね。御宅でなくつて坂井さんだつたから、本當に結構で御座います」と眞面目に悦びの言葉を述べたので、宗助もお米も少し挨拶に窮した。

印象 宗助と、お米と、清とが額をあつめて、泥棒が自分の家に這入つたのでなかつたのを喜んで居るさまが見える。

門

小六は、宗助の家に移つて酒を飲んだ。宗助は、お米を連れて来た。お米は、お米の心算で居た。

六

或時お米は宗助に斯んな問を掛けた。

「小六さんは、安さんの所へ行くたんびに、小遣でも貰つて来るんでせうか」  
今迄小六に就て、夫程の注意を拂つてゐなかつた宗助は、突然此間に逢つて  
すぐ「何故」と聞き返した。お米はしばらく逡巡つた末、

「だつて此頃能くお酒を飲んで歸つて来る事があるのよ」と注意した。

「安さんが例の發明や、金儲けの話をするとき、其聞き賃に奢るのかも知れない」と云つて宗助は笑つてゐた。會話はそれなりでつい發展せずに仕舞つた。

「越えて三日目の夕方に、小六はまた飯時を外して歸つて来なかつた。しばらく待ち合せてゐたが、宗助はつひに空腹だとか云ひ出して、一寸湯にでも行つ

て時間を延ばしたらといふ、お米の小六に對する氣象に頓着なく、食事を始め  
た。其時お米は夫に

「小六さんに御酒を止める様に、貴方から云つちや不可なくつて」と切出した  
「そんなに意見しなければならぬ程飲むのか」宗助は少し案外な顔をした

お米は夫程でもない辯護しなければならなかつた。けれども實際は誰もゐ  
ない晝間のうち杯に、あまり顔を赤くして歸つて来られるのが不安だつたので  
ある。宗助は夫なり放つて置いた。然し腹の中では、果してお米の云ふ如く、  
何處かで金を借りるか貰ふかして、夫れ程好きもしないものを、わざと飲むの  
ではなからうかと疑つた。

其うち年が段々片寄つて、夜が世界の三分の二を領する様に押し詰つて来た。  
風が毎日吹いた。其音を聞いてゐるだけでも、生活に陰氣な響を與へた。小六

二五二  
はどうしても六疊に籠つて、一日を送るに堪へなかつた。落ち付いて考へれば考へる程、頭が淋しくつて、居たまらなくなる許であつた。茶の間へ出て嫂と話すのは猶厭であつた。己を得ず外へ出た。さうして友達の宅をぐるぐる廻つて歩いた。友達も始めのうちは、平生の小六に對する様に、若い學生のしたがる面白い話を幾何でもした。けれども小六はさう云ふ話が盡きても、まだ遣つて來た。それで仕舞には友達が小六は退屈の餘りに訪問をして、談話の復習に耽るものだと言つた。たまには學校の下讀やら研究やらに追はれてゐる、多忙の身だと云ふ風もして見せた。小六は友達からさう呑氣な怠けものゝ様に取られ扱はれるのを、大變不愉快に感じた。けれども宅に落付いては、讀書も思索も、丸で出来なかつた。要するに彼位の年輩の青年が、一人前の人間になる階梯として、修むべき事、力むべき事には、内部の動搖やら、外部の束縛やらで、

一切手が着かなかつたのである。

夫でも冷たい雨が横に降つたり、雪融の道がはげしく泥つたりする時は、着物を濡らさなければならず、足袋の泥を乾かさなければならぬ面倒があるの  
で、如何な小六も時によると、外出を見合わせる事があつた。さう云ふ日には實際困却すると見えて、時々六疊から出て來て、のそりと火鉢の傍へ坐つて、茶などを注いで飲んだ。さうして其處にお米でもゐると、世間話の一つや二つはしないとも限らなかつた。

「小六さんお酒好き」とお米が聞いた事があつた。

「もう直お正月ね。貴方御雑煮いくつ上がつて」と聞いた事もあつた。

さう云ふ場合が度重なるに連れて、二人の間は少しづつ近寄る事が出來た。

仕舞には姉さん一寸こゝを縫つて下さいと小六の方から進んで、お米に物を頼

む様になつた。さうしてお米が緋の羽織を受取つて、袖口の綻びを繕つてゐる間、小六は何もせずに其處へ坐つて、お米の手先を見詰めてゐた。これが夫だと、何時迄も黙つて針を動かすのがお米の例であつたが、相手が小六の時にはさう投遣に出来ないのが、又お米の性質であつた。だからそんな時には力めて話をした。話の題目で、稍々もすると小六の口に宿りたがるものは、彼の未來を何うしたら好からうと云ふ心配であつた。

「だつて小六さんなんか、まだ若いぢやありませんか、何をしたつて是からだわ。そりや兄さんの事よ。さう悲觀しないでも可いわ」

お米は二度計り斯ういふ慰め方をした。三度目には、

「來年になれば、安さんの方で何うか都合して上げるつて受合つて下すつたんぢやなくつて」と聞いた。小六は其時不慥な表情をして、

「そりや安さんの計畫が、口でいふ通り行く行けば譯はないんでせうが、段々考へると何だか少し當にならない様な氣がし出してね。鯉船もあんまり儲からない様だから」と云つた。お米は小六の懨然としてゐる姿を見て、それを時々酒氣を帯びて歸つて来て、何處かに殺氣を含んだ、しかも何が癪に障るんだか譯が分らないでゐて、甚だ不平らしい小六と比較すると、心の中で氣の毒にもあり、又可笑しくもあつた。其時は

「本當にね。兄さんにさへお金があると、何うでもして上げる事が出来るんだけれど」と、お世辭でも何でもない、同情の意を表した。

其夕暮であつたか。小六は又寒い身體を外套に包んで出て行つたが、八時過ぎに歸つて来て、兄夫婦の前で、袂から白い細長い袋を出して、寒いから蕎麥掻を拵へて食はうと思つて、佐伯へ行つた歸りに買つて來たと云つた。さうして



お米が湯を弗かしてゐるうちに、煮出しを拵へるさか云つて、しきりに鏝節を搦いた。

其時宗助夫婦は最近の消息として、安之助の結婚がとう／＼春迄延びた事を聞いた。此縁談は安之助が學校を卒業すると間もなく起つたもので、小六が房州から歸つて、叔母に學資の供給を斷られる時分には、もう大分話が進んでゐたのである。正式の通知が來ないので、何時纏まつたか、宗助は丸で知らなかつたが、たゞ折々佐伯へ行つては、何か聞いて來る小六を通じてのみ、彼は年内に式を擧げる筈の新夫婦を豫想した。其他には嫁の里が、あの會社員で有福な生活をしてゐる事と、其學校が女學館であるといふ事と、兄弟が澤山あると云ふ事丈を、同じく小六を通じて、

「好い器量？」とお米が聞いた事がある。

「まあ好い方でせう」と小六が答へた事がある。

其晩は何故暮のうちに式を済まさないかと云ふのが、蕎麥搦い出来上る間、三人の話題になつた。お米は方位でも悪いのだらうと臆測した。宗助は押し詰つて日がないからだらうと考へた。獨り小六丈が、

「矢張り物質的の必要からしいです。先が何でも餘程派手な家なんで、叔母さんの方でもさう簡単に済まされないんでせう」と何時にない世帯じみた事を云つた。

印象 いら／＼した心を酒で紛らさうとする小六、さう云ふ弟を何うしやうもなく眺めて居る宗助の心音が覗かれる。

宗助夫婦は、お米の淋しい顔を見て、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、  
お米の毒を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、

思に不幸の感  
が深かつた。

始めて身重になつたのは、二人が京都を去つて廣島に瘠世帯を張つてゐる時  
であつた。懷妊と事が極つたとき、お米は此新しい經驗に對して、恐ろしい未  
來と、嬉しい未來を、一度に夢に見る様な心持を抱いて日を過ぎて、宗助はそ  
れを眼に見えない愛の精に、一種の確證となるべき形を與へた事實と、ひとり  
解釋して少からず喜んだ。さうして自分の命を吹き込んだ肉の塊が、目の前に  
踊る時節を指を折つて樂しみに待つた。處が胎兒は夫婦の豫期に反して、五箇  
月迄育つて突然下りて仕舞つた。其時分の夫婦の活計は苦しい苛い月ばかり續  
いてゐた。宗助は流産したお米の蒼い顔を眺めて、是も畢竟は世帯の苦勞から  
起るんだと判じた。さうして受情の結果が、貧のために打崩されて、永く手の  
裡に捕へる事の出來なくなつたのを残念がつた。お米はひたすら泣いた。  
福岡へ移つてから間もなく、お米は又酸いものを嗜む人となつた。一度流産

すると癖になると聞いたので、お米は萬に注意して、つゝまじやかに振舞つて  
ゐた。其所爲か經過は至極順當に行つたが、どうした譯か、是といふ原因もな  
いのに、月足らずで生れて仕舞つた。産婆は首を傾けて、一度醫者に見せる様  
に勧めた。醫者に診て貰ふと、發育が充分でないから、室内の溫度を一定の高  
さにして、晝夜とも變らない位人工的に暖めなければ不可ない云つた。宗助  
の手際は、室内に煖爐を据え付ける設備をする丈でも容易ではなかつた。夫  
婦はわが時間と算段の許す限りを盡して、専念に赤兒の命を護つた。けれども  
凡ては徒勞に歸した。一週間の後、二人の血を分けた情の塊は遂に冷たくな  
つた。お米は幼兒の亡骸を抱いて、  
「何らしませう」と啜り泣いた。宗助は再度の打撃を男らしく受けた。冷たい  
肉が灰になつて、其灰が又黒い土に和する迄、一口も愚知らしい言葉は出さな

二六〇  
かつた。其内何時となく、二人の間に挟まつてゐた影の様なものが、次第に遠退いて程なく消えて仕舞つた。

すると三度目の記憶が來た。宗助が東京に移つて始めての年に、お米は又懐妊したのである。出京の當座は、大分身體が衰へてゐたので、お米は勿論、宗助もひさく其處を氣遣つたが、今度こそはといふ腹は兩方にあつたので、張のある月を無事に段々と重ねて行つた。處が丁度五月目になつて。お米は又意外の失敗を遣つた。其頃はまだ水道も引いてなかつたから、朝晩下女が井戸端へ出て水を汲んだり、洗濯をしなければならなかつた。お米はある日裏にゐる下女に云ひ付ける用が出來たので、井戸流しの傍に置いた鹽の傍行つて話をした序に、流しを向へ渡らうとして、青い苔の生えてゐる濡れた板の上へ尻持を突いた。お米はまた遣り損なつたとは思つたが、自分の粗忽を面目ながつて、

宗助にはわざと何事も語らずに、其場を通した。けれども此震動が、何時迄経つても胎兒の發育に是といふ影響も及ぼさず、従つて自分の身體にも少しの異狀を引起さなかつた事が慥に分つた時、お米は漸く安心して、過去の失を改めて宗助の前に告げた。宗助は固より妻を咎める意もなかつた。たゞ、  
「能く氣を付けないと危ないよ」と穏かな注意を加へて過ぎた。

兎角するうちに月が満ちた。愈々生れるといふ間際迄日が詰つたとき、宗助は役所へ出ながらも、お米の事が頻りに氣に掛つた。歸りには何時も、今日はことによると留守のうちに杯と案じ續けては、自分の家の格子の前に立つた。さうしてゐる赤兒の泣聲が聞えないと、却つて何かの變でも起つたらしく感じ、急いで宅へ飛び込んで、自分と自分の粗忽を耻づる事があつた。

幸ひにお米の産氣づいたのは、宗助の外に用のない夜中だつたので、傍にゐ

て世話の出来るると云ふ點から見れば甚だ都合が好かつた。産婆も緩くり間に合ふし、脱脂綿其他の準備も悉く不足なく取り揃へてあつた。産も案外輕かつたけれども、肝心の小兒は、たゞ子宮を逃れて広い處へ出たといふ迄で、浮世の空気を一口も呼吸しなかつた。産婆は細い硝子の管の様なものを取つて、小さい口の内へ強い呼吸をしきりに吹き込んだが、効目は丸でなかつた。生れたものは肉丈であつた。夫婦は此肉に刻み付けられた、眼と鼻と口とを髣髴した。然し其咽喉から出る聲は遠に聞く事が出来なかつた。

産婆は出産のあつたついで一週間前に來て、丁寧に胎兒の心臓迄聴診して、至極御健全だと保證して行つたのである。よし産婆の云ふ事に間違があつて、腹の兒の發育が今迄のうちに何處かで止つてゐたにした處で、それが直取出されない以上、母體は今日迄平氣に持ち應へる譯がなかつた。其處を段々調べて見

て、宗助は自分が未だ嘗て聞いた事のない事實を發見した時に、思はず、恐れ驚いた。胎兒は出る間際迄健康であつたのである。けれども臍帶纏絡と云つて俗に云ふ胞を頸へ捲き付けてゐた。斯う云ふ異状の場合には、固より産婆の腕で切り抜けるより外に仕様のないもので、經驗のある婆さんなら、取り上げる時に、旨く頸に掛かつた胞を外して引き出す筈であつた。宗助の頼んだ産婆も可成年を取つてゐる丈に、此位のことには心得てゐた。然し胎兒の頸に絡んでゐた臍帶は、時たまある如く一重ではなかつた。二重に細い咽喉を巻いてゐる胞を、あの細い所を通す時に外し損なつたので、小兒はぐつと氣管を絞められて窒息して仕舞つたのである。

罪は産婆にもあつた。けれども半以上はお米の落度に違なかつた。臍帶纏絡の變状は、お米が井戸端で滑つて痛く尻持を突いた五箇月前既に自ら醸したも

のと知れた。お米は産後の尊中に其始末を聞いて、たゞ軽く首肯いたきり何にも云はなかつた。さうして、疲労に少し落ち込んだ眼を奮ませて、長い睫毛をしきりに動かした。宗助は慰めながら手帛で頬に流れる涙を拭いて遣つた。

是が子供に關する夫婦の過去であつた。此苦い經驗を嘗めた彼等は、それ以後幼児に就て餘り多くを語るを好まなかつた。けれども二人の生活の裏側は、此記憶のために淋しく染め付けられて、容易に剝げさうには見えなかつた。時としては、彼我の笑聲を通してさへ、お互の胸に、此裏側が薄暗く映る事もあつた。斯ういふ譯だから、過去の歴史を今夫に向つて新たに繰返さうとは、お米も思ひ寄らなかつたのである。宗助も、今更妻からそれを聞かせられる必要は少しも認めてゐなかつたのである。

お米の夫に打ち明けると云つたのは固より二人の共有してゐた事實に就てよ

はなかつた。彼女は三度目の胎児を失つた時、夫から其折の模様を聞いて、如何にも自分が残酷な母であるかの如く感じた。自分が手を下した覺がないにせよ、考へ様によつては、自分と生を與へたものゝ生を奪ふために、暗闇と明海の途中に待受けて、これを絞殺したと同じ事であつたからである。斯う解釋した時、お米は恐ろしい罪を犯した悪人己を見做さない譯に行かなかつた。さうして思はざる徳義上の苛責を人知れず受けた。しかし其苛責を分つて、共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかつた。お米は夫にさへ此苦しみを語らなかつたのである。

印象 闇から闇へと葬り去らねばならぬ苛責に、ひし／＼胸を打たれるお米の惱みが思はれる。

宗助が、京都の學校に  
 居た時、安井に  
 交際して居る  
 中、休暇が済  
 んだ時、安井が  
 京都へ戻つて  
 来た時、安井が  
 一人見なれな  
 一人、安井が居  
 のた、安井は僕  
 の妹、安井は僕  
 段々往來した  
 居る間に、安井  
 の妹、安井は僕  
 女、安井は僕  
 言葉、安井は僕

たすやうになつ

八

其中又秋が来た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰返す其味に乏しかつた宗助は、安井とお米に誘はれて茸狩に行つた時、朗かな空氣のうちに又新しい香を見出した。紅葉も三人で観た。嵯峨から山を抜けて高雄へ歩く途中で、お米は着物の裾を捲くつて、長襦袢丈を足袋の上迄牽いて、細い傘を杖にして山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時。お米は

「京都は好い所ね」と云つて二人を顧みた。それを一所に眺めた宗助にも、京都は全く好い所の様に思はれた。

斯う揃つて外へ出た事も珍らしくはなかつた。家の中で顔を合せる事は猶屢々あつた。或時宗助が例の如く安井を尋ねたら、安井は留守で、お米ばかり淋しい秋の中に取残された様に一人坐つてゐた。宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで一つ火鉢の兩側に手を翳しながら、思つたより長話をして歸つた。或時宗助がほかんとして、下宿の机に倚りかゝつた儘、珍らしく時

間の使ひ方に困つてゐると、ふとお米が遣つて来た。其處迄買物に出たから、序に寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり、菓子を食べたり、緩くり寛ろいだ話をして歸つた。

斯んな事が重なつて行くうちに、木の葉が何時の間にか落ちて仕舞つた。さうして高い山の頂が、ある朝眞白に見えた。吹き曝しの河原が白くなつて、橋を渡る人の影が細く動いた。其年の京都の冬は、音を立てずに肌を透す陰忍な其のものであつた。安井は此惡性の寒氣に中てられて、苛いインフルエンザ

に罹つた。熱が普通の風邪よりも餘程高かつたので、始めはお米も驚いたが、それは一時の事ですぐ退いたには退いたから、是でもう全快と思ふと、何時迄立つても判然しなかつた。安井は鵜の様な熱に絡み付かれて毎日其差引に苦んだ。

醫者は少し呼吸器を冒されてゐる様だからと云つて、切に轉地を勧めた。安井は心ならず押入の中の柳行李に麻繩を掛けた。お米は手提鞆に鏡を卸した。宗助は二人を七條迄見送つて、汽車が出る迄室の中へ這入つて、わざと陽氣な話をした。プラツトフォームへ下りた時、窓の内から、

「遊びに来給へ」と安井が云つた。

「何うぞ是非」とお米が言つた。

汽車は血色の好い宗助の前をそろ／＼過ぎて、忽ち神戸の方に向つて煙を吐いた。

病人は轉地先で年を越した。繪葉書は着いた日から毎日の様に寄こした。それに何時でも遊びに来いと繰返して書いてない事はなかつた。お米の文字も一、二行宛は必ず交つてゐた。宗助は安井とお米から届いた繪葉書を別にして机の上重ねて置いた。外から歸るとそれが直眼に着いた。時々それを一枚宛順に讀み直したり、見直したりした。仕舞にもう悉皆癒つたから歸る。然し折角此處迄來ながら、此處で君の顔を見ないのは遺憾だから、此手紙が着き次第、一寸で可いから來いといふ端書が來た。無事と退屈を忌む宗助を動かすには、この十數言で充分であつた。宗助は汽車を利用して其夜のうちに安井の宿に着いた。明るい燈火の下に、三人が待設けた顔を合はした時、宗助は何よりも先づ病人の色澤の回復して來た事に氣が付いた。立つ前よりも却て好い位に見えた。

安井自身もそんな心持がすると云つて、わざ／＼襦衣の袖を捲り上げて、青筋の入つた腕を獨で撫でゝゐた。お米も嬉しさに眼を輝かした。宗助にはその活潑な目遣が殊に珍らしく受取れた。今迄宗助の心に映じたお米は、色と音の繚亂する裏に立つてさへ、極めて落ち付いてゐた。さうして其落ち付きの大部分は、矢鱈に動かさない眼の働きから來たとしか思はれなかつた。

次の日三人は表へ出て、遠く濃い色を流す海を眺めた、松の幹から脂の出る空氣を吸つた。冬の日は短い空を赤裸々に横切つて大人しく西に落ちた。落ちる時、低い雲を黄に赤に竈の火の色に染めて行つた。風は夜に入つても起らなかつた。たゞ松を鳴らして過ぎた。暖かい好い日が宗助の泊つてゐる三日の間續いた。

宗助はもつと遊んで行きたいと云つた。お米はもつと遊んで行きませうと云

つた。安井は宗助が遊びに來たから好い天氣になつたんだらうと云つた。三人は又行李と鞆を携へて京都に歸つた。冬は何事もなく北風を寒い國へ吹き遣つた。山の上を明かにした斑な雪が次第に落ちて、後から青い色が一度に芽を吹いた。

宗助は當時を憶ひ出すたびに、自然の進行が其處ではたりと留まつて、自分もお米も忽ち化石して仕舞つたら、却て苦はなかつたらうと思つた。事は冬の下から春が頭を擡げる時分に始まつて、散り盡した櫻の花が若葉に色を易へる頃に終つた。凡てが生死の戦ひであつた。青竹を炙つて油を絞る程の苦しみであつた。大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。二人が起き上がった時は、何處も彼處も既に砂だらけであつたのである。彼等は砂だらけになつた自分達を認めなければ、何時吹き倒されたかを知らなかつた。



世間は容赦なく彼等に徳義上の罪を背負した。然し彼等自身は徳義上の良心に責められる前に、一旦茫然として、彼等の頭が確であるかを疑つた。彼等の眼に、不徳義の男女として恥づべく、映る前に、既に不合理な男女として不可思議に映つたのである。其處に言譯らしい言譯が何にもなかつた。だから其處に云ふに忍びない苦痛があつた。彼等は残酷な運命が氣紛れに罪もない二人の不意を打つて、面白半分罪の中に突き落したのを無念に思つた。

曝露の日がまともに彼等の眉間を射たとき、彼等は既に徳義的に癡學の苦痛を乗り切つてゐた。彼等は蒼白い額を素直に前に出して、其處に焔に似た焔印を受けた。さうして無形の鎖で繋がれた儘、手を携へて何處迄も一所に歩調を共にしなければならぬ事を見出した。彼等は親を棄てた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云へば一般の社會を棄てたもしくは夫等から棄てられた。

學校からは無論棄てられた。たゞ表向丈は此方から退學した事になつて、形式の上人間らしい迹を留めた。

是が宗助とお米の過去であつた。

印象 宗助の、人妻であつたお米と戀に落ちてゆくさまが、あり／＼と眼に見えるではないか。

九

此處にゐると、もう何處とも交渉はない。全く氣樂です。悠くりして居らつしやい。實際 正月と云ふものは豫想外に煩瑣いものです。私も昨日迄で殆どへと／＼に降参させられました。新年が停滯してゐるのは實に苦しいですよ。夫で今日の午から、とう／＼塵世を遠ざけて、病氣になつてぐつと寢込んぢま

坂井の家にて  
棒が遺つて  
かから宗助は  
ちよい宗助は  
井の家から迎  
へを受けかて  
遊びに出かけ  
るやうになつ

た。宗助は、  
今も女中の使  
井の家に来て、  
て、主人に話  
だをして居る  
た。居る話

ひました。今しがた眼を覺まして湯に入つて、それから飯を食つて、煙草を呑んで、氣が付いて見ると、家内が子供を連れて親類へ行つて留守なんでせう、成程静かな筈だと思ひましてね。すると今度は急に退屈になつたのです。人間も随分我儘なものですよ。然しいくら退屈だつて此上お目出たいものを、見たり聞いたりしちや骨が折れますし、又お正月らしいものを、呑んだり食つたりするのにも恐れますから、それでお正月らしくない、と云ふと失禮だが、まあ世の中とあまり縁のない貴方、と云つてもまた失敬かも知れないが、つまり一口に云ふと、超然派の一人と話がして見なくなつたんで、それでわざ／＼使を上げた様な譯なんです」と坂井は例の調子で悉くすらく／＼したものであつた。宗助は此樂天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があつた。さうして時によると、自分かもし順當に發展して來たら、斯んな人物になりはしなかつ

たらうかと考へた。

六處へ下女が三尺の狭い入口を開けて這入つて來たが、改めて宗助に鄭重な御辭儀をした上、木皿の様な菓子皿の様なものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口もものを云はずに退がつた。木皿の上には護謨毬ほどの大きな田舎饅頭が一つ載せてあつた。それに普通の倍以上もあらうと思はれる楊枝が添へてあつた。

「何うです暖かい内」と主人が云つたので、宗助は始めて此饅頭を蒸して間もない新しさに氣が付いた。珍らしさうに黄色い皮を眺めた。

「いや出來たてぢやありません」主人が又云つた。實は昨夜ある所へ行つて冗談半分に賞めたら、御土産に持つて入らつしやいと云ふから貰つて來たんです。其時は全く暖かだつたんですがね。これは今上げやうと思つて蒸し返さ

したのです」

主人は箸とも楊枝とも片の付かないもので、無雑作に饅頭を割つて、むしやむしや食ひ始めた。宗助も聲に倣らつた。

其間に主人は昨夕行つた料理屋で逢つたとか云つて、妙な藝者の話をした。此藝者はボツケツト論語が好きで、汽車へ乗つたり遊びに行つたりするときに何時でも夫を懐にして出るさうであつた。

「それでね孔子の門人のうちで、子路が一番好だつて云ふんですがね。其所謂を聞くと、子路と云ふ男は、一つ何か教はつて、それをまだ行はないうちに、又新しい事を聞くと苦にする程正直だからだつて云ふんです。實の所私も子路はあまりよく知らないから困つたが、何しろ一人好い人が出来て、それと夫婦にならない前に、また新しく好い人が出来ると苦になる様なものぢやないか

つて聞いて見たんです……」

主人は斯んな事を甚だ氣樂さうに述べ立てた。其話の様子からして考へるに彼はのべつに斯ういふ場所に入出して、其刺戟にはとうに痺痺しながら、因習の結果、依然として月に何度となく同じ事を繰返してゐるらしかつた。よく聞き糺して見ると、しかく平氣な男も時々は歡樂の飽滿に疲勞して、書齋のなかで精神を休める必要が起るのださうであつた。

宗助はさういふ方面に丸で經驗のない男ではなかつたので、強ひて興味を裝ふ必要もなく、たゞ尋常な挨拶をする所が、却て主人の氣に入らしかつた。彼は平凡な宗助の言話のなから、一種異彩のある過去を覗く様な素振を見せた。然しそちらへは宗助が進みながらない痕迹が少しでも出ると、すぐ話を轉じた。それは政略よりも寧ろ禮讓からであつた。従つて宗助には毫も不愉快を

與へなかつた。

其内小六の噂が出た。主人は此青年に就いて、肉身の兄が見送す様な新しい観察を、二三有つてゐた。宗助は主人の評語を、當ると當らないとに論なく、面白く聞いた。そのなかに、彼は年に合はしては複雑な實用に適しない頭を有つてゐながら、年よりも若い單純な性情を平氣で露はす子供ぢやないかといふ質問があつた。宗助はすぐそれを首肯つた。然し學校教育で社會教育のないものは、いくら年を取つても其傾きがあるだらうと答へた。

「左様。それと反對で、社會教育のないものは、随分複雑な性情を發揮する代に、頭は何時迄も子供ですからね。却て始末が悪いかも知れない」  
主人は此處で一寸笑つたが、やがて、

「何うです、私の所へ書生に寄こしちや、少しは社會教育になるかも知れな

い」と云つた。主人の書生は彼の犬が病氣で病院へ這入る一ヶ月前とかに、徴兵検査に合格して入營したきり、今では一人もおかないのださうであつた。

宗助は小六の處置を付ける好機會が、求めざるに先だつて春に自から回つて來たのを喜んだ。同時に、今迄世間に向つて、積極的に好意と親切を要求する勇氣を有たなかつた彼は、突然此主人の申出に逢つて少し間諛つく位驚いた。けれども出來るなら成丈早く弟を坂井に預けて置いて、此變動から出る自分の餘裕に、幾分か安之助の補助を足して、さうして本人の希望通り、高等の教育を受けさせてやらうといふ分別をした。そこで打ち明けた話を腹藏なく主人にすると、主人は成程々と聞いてゐる丈であつたが、仕舞に雜作なく「そいつは好いでせう」と云つたので、相談は略其座で纏まつた。

宗助は其所で辭して歸れば可かつたのである。又辭して歸らうとしたのであ



抱いたのである。

彼は冷たい火鉢の灰の中に細い線香を燻らして、教へられた通り座蒲團の上  
に半跏を組んだ。晝のうちは左迄とは思はなかつた室が日が落ちてから急に寒  
くなつた。彼は坐りながら、背中のぞくぞくする程温度の低い空気に堪へな  
かつた。彼は考へた。けれども考へる方向も、考へる問題の實質も、殆んど捕ま  
へ様のない空漠なものであつた。

彼は考へながら、自分は非常に迂濶な眞似をしてゐるのではなからうかと疑  
つた。火事見舞に行く間に、細かい地圖を出して、仔細に町名や番地を調べ  
てゐるよりも、ずつと飛離れた見當違の所作を演じてゐる如く感じた。

彼の頭の中を色々なものが流れた。其あるものは明かに眼に見えた。あるも  
のは混沌として雲の如くに動いた。何處から來て何處へ行くとも分らなかつた

たゞ先のものが消える、すぐ後から次のものが現れた。さうして仕切りなしに  
夫から夫へと續いた。頭の往來を通るものは、無數で無盡蔵で、決して宗助の  
命令によつて、留まる事も休む事もなかつた。斷ち切らうと思へば思ふ程、滾  
滾として湧いて出た。

宗助は怖くなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺めた。室は微か  
な灯で薄暗く照されてゐた。灰の中に立てた線香は、まだ半分程しか燃えてゐ  
なかつた。宗助は恐るべく時間の長いのに始めて氣が付いた。

宗助はまた考へ始めた。すると、すぐ色のあるものゝ形のあるものが頭の中  
を通り出した。凝としてゐるのはたゞ宗助の身體丈であつた。心は切ない程、  
苦しい程、堪へがたい程動いた。

其内凝としてゐる身體も、膝頭から痛み始めた。眞直に延ばしてゐた脊髄が

次第々々に前の方に曲つて来た。宗助は両手で左の足の甲を抱へる様にして下へ卸した。彼は何をする目的もなく室の中に立ち上つた。障子を明けて表へ出て、門前をぐる／＼馳回つて歩きたくなつた。夜はしんとしてゐた。寝てゐる人も起きてゐる人も何處にも居りさうには思へなかつた。宗助は外へ出る勇氣を失つた。凝と生きながら妄想に苦しめられるのは猶恐ろしかつた。

彼は思ひ切つて又新しい線香を立てた。さうして又略前と同じ過程を繰返した。最後に、もし考へるのが目的だとすれば、坐つて考へるのも寝て考へるのも同じだらうと分別した。彼は室の隅に疊んであつた薄汚ない蒲團を敷いて、其中に潜り込んだ。すると先刻からの疲れで、何を考へる暇もないうちに、深い眠りに落ちて仕舞つた。

眼が覺めると枕元の障子が何時の間にか明るくなつて、白い紙にやがて日の

通るべき色が動いた。晝も留守を置かずに濟む山寺は、夜に入つても戸を閉てる音を聞かなかつたのである。宗助は自分が坂井の崖下の暗い部屋に寝てゐたのでないと意識するや否や、すぐ起き上がった。椽へ出るご軒端に高く大靱玉樹の影が眼に映つた。宗助は又本堂の佛壇の前を抜けて、圍爐裏の切つてある昨日の茶の間へ出た。其處には昨日の通り宜道の法衣が折釘に懸けてあつた。さうして本人は勝手の前で躑躅まつて、火を焚いてゐた。宗助を見て、「お早う」と慇懃に禮をした。「先刻御誘ひ申さうと思ひましたが、よく御寝の様でしたから、失禮して一人参りました」

宗助は此若い僧が、今朝夜明がたに既に参禪を済まして、夫から歸つて来て飯を炊いてゐるのだといふ事を知つた。

見ると彼は左の手で頻りに薪を差し易へながら、右の手に黒い表紙の本を持

つて、用の合間／＼に夫を讀んでゐる様子であつた。宗助は宜道に書物の名を尋ねた。それは碧岩集といふ六かしい名前のものであつた。宗助は腹の中で、昨夕の様に當途もない考へに耽つて、腦を疲らすより、一層其道の書物でも借りて讀む方が要領を得る捷徑ではなからうかと思ひ付いた。宜道にさう云ふと宜道は一も二もなく宗助の考へを排斥した。

「書物を讀むのは極悪う御座います。有體に云ふと、讀物程修養の妨げになるものは無い様です。私共でも斯うして碧岩杯どを讀みますが、自分の程度以上の所になると、丸で見當が付きません。それを好い加減に揣摩する癖がつくとそれが坐る時の妨げになつて、自分以上の境界を豫期して見たり。悟りを待ち受けて見たり、充分突込んで行くべき所に頓挫が出来ます。大變毒になりますから、御止しになつた方が可いでせう。もし強いて何か御讀みになりたければ、禪關策進といふ様な、人の勇氣を鼓舞したり激勵したりするものが宜しう御座いませう。それだつて、唯刺戟の方便として讀む丈で、道其物とは無關係です」

宗助には宜道の意味がよく解らなかつた。彼は此生若い青い頭をした坊さんの前に立つて、恰も一個の低能兒であるかの如き心持を起した。彼の慢心は京都以來既に鎖磨し盡して、宜道の前に立つたのである。しかも平生の自分より遙に無力無能な赤子であると、更に自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新しい發見であつた。同時に自尊心を根絶する程の發見であつた。

**印象** 良心の苛責に居たゝまらず、鎌倉に逃げ出して、禪寺に我れと我が身を責めて居るさまが見える。



宗助が山に米  
から成りお長  
い紙がもつた  
二本も来たう  
尤も宗助の心  
を配すやうな  
心配事は、書  
いてなかつた  
が、宗助は、思  
ひつゝ、宗助は  
事に出さな返  
つた。宗助は、  
山を此間に  
何さか片を  
折角な甲斐  
も折角な甲斐

彼は自分の室で獨り考へた。疲れると臺所から下りて、裏の茶園へ出た。さうして崖の下に掘つた横穴の中へ這入つて、凝と動かすにゐた。宜道は氣が散る様では駄目だと云つた。段々集注して凝固まつて、仕舞に棒の様にならなくては駄目だと云つた。さう云ふ事を聞けば聞く程、實際にさうなるのが困難になつた。

「既に頭の中に、さう仕様と云ふ下心があるから不可ないのです」と宜道が又云つて聞かした。宗助は愈々窮した。忽然安井の事を考へ出した。安井がもし坂井の家へ頻繁に出入りでもする様になつて、當分滿洲へ歸らないとすれば、今のうちあの借家を引き上げて、何處かへ轉宅するのが上分別だらう。こんな所

に宜道に對し  
ても濟まな  
い氣がし  
た。

に愚圖々々してゐるより、早く東京へ歸つて其方の處置を付けた方が、まだ實際的かを知れない。緩くり構へてお米にでも知れると又心配が殖える丈だと思つた。

「私の様なものには到底悟は開かれそうに有りません」と思ひ詰めた様に宜道を捕まへて云つた。それは歸る二三日前の事であつた。

「いえ信念さへあれば誰れでも悟れます」と宜道は躊躇もなく答へた。法華の癡り固まりが夢中に大鼓を叩く様に遣つて御覽なさい。頭の巔邊から足の爪先迄で悉く公案で充實したとき、俄然として新天地が現前するので御座います」

宗助は自分の境遇やら性質が、夫程盲目的に猛烈な傲きを敢てするに適しない事を深く悲しんだ、況や自分の此山で暮らすべき日は既に限られてゐた。彼は直截に生活の葛藤を切り拂ふ積で、却て迂濶に山の中へ迷ひ込んだ愚物であ

つた。

彼は腹の中で斯う考へながら、宜道の面前で、それ丈の事を言ひ切る力がなかつた。彼は心から此若い禪僧の勇氣と、熱心と、眞面目と、親切とに敬意を表してゐたのである。

「道は近きにあり、却て之を遠きに求むといふ言葉があるが實際です。つい鼻の先にあるのですけれども、何うしても氣が付きません」と宜道はさも残念さうであつた。宗助は又自分の室に退いて線香を立てた。

斯う云ふ状態は、不幸にして宗助の山を去らなければならぬ日迄、目に立つ程の新生面を開く機會なく續いた。愈々出立の朝になつて宗助は深く未練を抛げ棄てた。

「永々御世話になりました。残念ですが、何うも仕方がありません。もう當分

御眼に掛かる折も御座いますまいから、随分御機嫌よう」と宜道に氣の毒さうであつた。

「御世話どころか、萬事不行届で嘸御窮屈で御座いましたらう。然し是程御座りになつても大分違ひます。わさくお出になつた丈の事は充分御座います」と云つた。然し宗助には丸で時間を潰しに來た様な自覺が明らかにあつた。それを斯う取り繕つて云つた貰ふのも、自分の腑甲斐なさからであると、獨り恥入つた。

「悟りの遅速は全く人の性質で、それ丈では優劣にはなりません。入り易くても後で塞いて動かない人もありますし、又初め永く掛かつて、愈と云ふ場合に非常に痛快に出来るものもあります。決して失望な事事は御座いません。たと熱心が大切です。亡くなられた洪川和尚などは、もと儒教をやられて、中

年からの修業で御座いましたが、僧になつてから三年の間と云ふもの丸で一則も通らなかつたです。夫で私は業が深くて悟れないのだと云つて、毎朝剛に向つて禮拜された位でありましたが、後にはあのやうな知識になられました。これ杯は尤も好い例です」

宜道に斯んな話をして、暗に宗助が東京へ歸つてからも、全く此方を斷念しない様に、あらかじめ間接の注意を與へる様に見えた。宗助は謹んで宜道のいふ事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもう既に半分去つた如くに感じた。自分は門を開けて貰ひに來た。けれども門番は扉の向側にゐて、敲いても遂に顔さへ出して呉れなかつた。たゞ、

「敲いても駄目だ。獨で開けて入れ」と云ふ聲が聞えた文であつた。彼は何うしたら此門の門を開ける事が出来るかと考へた。さうして其手段と方法を明

かに頭の中で拵へた。けれども夫を實地に開ける力は、少しも養成する事が出来なかつた。従つて自分の立つてゐる場所は、此問題を考へない昔と毫も異なる所がなかつた。彼は依然として無能無力に鎖された扉の前に取り残された。彼は平生の自分の分別を便りに生きて來た。其分別が今は彼に崇つたのを口惜く思つた。さうして始めから取捨も容量も容れない愚なもの一徹一圖を羨んだ。もしくは信念に篤い善男善女の、知慧も忘れ、愚議も浮かばぬ精進の程度を嵩高し仰いだ。彼自身は長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて來たものらしかつた。夫れは是非もなかつた。けれども何うせ通れない門なら、わざわざ其處まで辿り付くのが矛盾であつた。彼は後を顧みた。さうして又到底元の路へ引返す勇氣を有たなかつた。彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時迄も展望を遮つてゐた。彼は門を通る人でなかつた。又門を通らないで濟む人でも



ながら、お米を見下して、

「まあ助かつた」と六づかし氣に云つた。其嬉しくも悲しくもない様子が、お米には天から落ちた滑稽に見えた。

又二三日して宗助の月給が五圓昇つた。

「原則通り二割五分増さないでも仕方があるまい。休められた人も、元給の儘である人も澤山あるんだから」と云つた。宗助は、此五圓に自己以上の價値をもたらし歸つた如く満足の色を見せた。お米は無論の事心のうちに、不足を訴へるべき餘地を見出さなかつた。

翌日の晩宗助はわが膳の上に頭つきの魚の、尾を皿の外に躍らす態を眺めた。小豆の色に染まつた飯の香を嗅いだ。お米はわざわざ清を遣つて、坂井の家に引き移つた小六を招いだ。小六は、

「やあ御馳走だなあ」と云つて勝手から入つて來た。

梅がちらほらに眼に入る様になつた。早いのは既に色を失つて散りかけた。雨は煙る様に降り始めた。それが霽れて、日に蒸されるとき、地面からも、屋根からも、春の記憶を新にすべき濕氣がむら／＼と立ち上つた。春戸に干した雨傘に、小犬がじやれ掛つて、蛇の目の色がきら／＼する所に、陽炎が燃える如く長閑に思はれる日もあつた。

「漸く冬が過ぎた様ね。貴方今度の土曜に佐伯の叔母さんの處へ廻つて、小六さんの事を極めて入らつしやいよ。あんまり何時迄も放つて置くと、又安さんが忘れて仕舞ふから」とお米が催促した。宗助は、

「うん、思ひ切つて行つて來よう」と答へた。小六は坂井の好意で、其處の書生に住み込んだ。其上に宗助と安之助が、不足の處を分擔する事が出來たらと

小六に云つて聞かしたのは、宗助自身であつた。小六は、兄の運動を待たずにすぐ安之助に直談判をした。さうして形式的に宗助の方から依頼すれば、すぐ安之助が引受ける迄に自分で埒を明けたのである。

小六は斯くして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜の午宗助は久し振りに、四日目の垢を流すため横町の洗湯に行つたら。五十許りの頭を剃つた男と、三十代の商人らしい男が、漸く春らしくなつたと云つて、時候の挨拶を取り換はしてゐた。若い方が、今朝始めて鶯の鳴聲を聞いたと話すと、坊さんの方が、私は二三日前にも一度聞いた事があると答へてゐた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」  
「えゝ、まだ充分舌が廻りません」

宗助は家に歸つてお米に此鶯の問答を繰返して聞かせた。お米は障子の硝

子に映る麗かな日影をすかして見て、

「本當に有難いわね、漸くの事春になつて」と云つて、晴れくしい眉を張つた。宗助は椽に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、然し又ちき冬になるよ」と答へて、下を向いたまゝ、鉢を動かしてゐた。

**印象** 宗助の家に、本當に春らしい春が来て、心からのびくしたやうな

さまが見られるではないか。



思つて歸つて来た。さうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの爲めに、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやちと兄と三人で暮して居た。おやちは何もせぬ男で人の顔さへ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖の様に云つて居た。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやちが有つたもんだ。兄は實業家になるこか云つて頻りに英語を勉強して居た。元來女の様な性分でするいから、仲がよくなかつた。十日に一週位の割で喧嘩をして居た。ある時將棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しさうに冷かした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやちに言付けた。おやちがおれを勘當すると言出した。

其時はもう仕方がないと觀念して先方の云ふ通り勘當される積りで居たら、十年來召し使つて居るお清と云ふ下女が、泣きながらおやちを詫言まつて、漸くおやちの怒りが解けた。それにも關らずあまりおやちを怖いとは思はなかつた。却つて此清と云ふ下女に氣の毒であつた。此下女はもご由緒あるものださうだが瓦解のときに零落して、つい奉公迄する様になつたのだと聞いてゐる。だから婆さんである。此婆さんがどう云う因縁か、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母は死ぬ三日前に愛想をつかした——おやちも年中持て餘してゐる。——町内では亂暴の惡太郎と爪弾をする——此おれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめて居たから、他人から木端の様に取り扱はれるのは何とも思はない。却つて此清の様にちやほやしてくれるのを不審に考へた。清は時々臺所で人の居ない時に『あなたは眞坊つちやん



つ直でよい御氣性だ』と賞める事が時々あつた。然しおれには清の云ふ意味が分らなかつた。好い氣性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらうと思つた。清がこんな事を云ふ度におれは御世辭は嫌だと答へるのが常であつた。すると婆さんは夫だから好い御氣性ですと云つては、嬉しさうにおれの顔を眺めて居る。自分の力でおれを製造して誇つてる様に見える。少々氣味がわるかつた。

印象 ぎんなにいたづら者だつたらうか、そのやんちや坊の姿が眼に映つて來るではないか。

二

挨拶が一通り済んだから、校長が今日はもう引き取つてもいい、尤も授業上

く、四國のあ  
る中學校の教  
師に彼は學校  
たに彼は學校  
に、彼は學校  
長から、教師  
書操の教師と  
それの教師と  
紹介され、彼  
同介され、彼  
そ、介され、  
つ、介され、  
り、介され、  
し、介され、  
つ、介され、

の事は數學の主任と打ち合せをして置いて、明後日から課業を始めると云つた。數學の主任は誰かと聞いて見たら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くのかおや〜と失望した。山嵐は『おい君ごに泊つてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する』と云ひ残して白墨を持つて教場へ行つた。主任の辭に向から來て相談するなんて不見識な男だ。然し呼び付けるよりは感心だ。

夫から學校の門を出て、すぐ歸らうと思つたが、歸つたつて仕方がないから少し町を散歩してやらうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした懸廳も見た。よい前世紀の建築である。兵營も見た。麻布の職隊より立派でない。大通りも見た。神樂坂を半分狭くした位な道幅で町並はあれより落ちる。二十五萬石の城下だつて高の知れたものだ。是で大抵に見盡したのだらう。歸つて

坊つちやん

飯でも食はうと門口を這入つた。帳場に座つて居たかみさんがおれの顔を見る  
 と急に飛び出して来て御歸り——と板の間へ頭をつけた。靴を脱いで上ると御  
 座敷があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五疊の表二階で大きな床  
 の間がついて居る。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へ這入つた事はな  
 い。此後いつ這入れるか分らないから、洋服を脱いで浴衣一枚になつて座敷の  
 真中へ大の字に寝て見た。いゝ心持ちである。

晝飯を食つてから早速清へ手紙を書いてやつた。おれは文章がまづい上に字  
 を知らないから手紙をかくのが大嫌だ。又やる所もない。然し清は心配して居  
 るだらう。難船して死にやしないか杯と思つちや困るから、奮發して長いのを  
 書いてやつた。其文句はかうである。

『きのう着いた。つまらん所だ。十五疊の座敷に寝て居る。宿屋へ茶代を五圓

やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかつた。清が笹  
 飴を笹ごと食ふ夢を見た。來年の夏は歸る。今日學校へ行つてみんなにあだな  
 をつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、數學は  
 山嵐、畫學はのだいこ、今に色々な事をかいてやる。左様なら』

手紙をかいて仕舞うたら、いゝ心持になつて眠氣がさしたから最前の様に座  
 敷の真中へのびくと大の字に寝た。今度は夢も見ないでぐつする寝た。この  
 部屋かいと大きな聲がするので眼が覺めたら、山嵐が這入つて來た。最前は失  
 敬君の受持ち……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので狼狽した。受  
 持を聞いて見ると別段六つかしい事もなさうだから承知した。此位な事なら  
 明後日は愚、明日から始めると云つたつて驚かない。授業上の打合せが済んだ  
 ら、君はいつ迄こんな宿屋に居る積りでもあるまい、僕がいゝ下宿を周旋して

やるから移り玉へ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいゝから、今日見て、あす移つて、あさつてから學校へ行けば極りがいゝと一人で呑み込んで居る。成程十五疊敷にいつ迄居る譯には行くまい。月給をみんな宿料に拂つても追ツつかないかもしれぬ。五圓の茶代を奮發してすぐ移るのはちと残念だがどうせ移る者なら、早く引き越して落ち付く方が便利だからその所はよろしく山嵐に頼む事にした。すると山嵐は兎も角も一所に来て見ると云ふから、行つた。町はづれの岡の中腹にある家で至極閑靜だ。主人は骨董を賣買するいか銀と云ふ男で、女房は亭主よりも四つ許り年嵩の女だ。中學校に居た時キツチ云ふ言葉を知つた事があるが此女房は正にキツチに似て居る。キツチだつて人の女房だから構はない。とう／＼明日から引き移る事にした歸りに山嵐は町通で氷を一杯奢つた。學校で逢つた時はいやに横風な失敬な

三六

奴だと思つたが、こんな色々世話をしてくれる所を見ると、わるい男でもなささうだ。只おれと同じ様にせつかちで肝癪持ちらしい。あみで聞いたら此男が一番生徒に人望があるさうだ。

印象 坊つちやんは、何處まで行つても坊つちやん式だ、これでは世渡りは六づかしいだらう。

三

其うち學校もいやになつた。ある日の晩大町と云ふ所を散歩して居たら郵便局の隣りに蕎麥とかいて、下に東京と註を加へた看板があつた。おれは蕎麥が大好きである。東京に居つたときでも蕎麥屋の前を通つて薬味の香ひをかぐとどうしても暖簾がくよりたくなつた。今日迄は數學と骨董で蕎麥を忘れて居た

坊つちやん

三〇九

彼は、體操の教師の話を聞かして、骨董屋の二階を借りて、學校へ出て居た。

が、かうして看板を見ると素通りが出来なくなる。序でだから一杯食つて行かうと思つて上がり込んだ。見ると看板程でもない。東京と断はる以上はもう少し奇麗にしさうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか滅法きたない。疊は色が變つて御負けに砂でざら／＼してゐる。壁は煤で眞黒だ。天井はランプの油煙で燻ほつてるのみか、低くつて、思はず首を縮める位だ。只置々と蕎麥の名前をかいて張り付けたねだん丈は全く新しい。何でも古いうちを持つて一三日前から開業したに違なからう。ねだん付の第一號に天麩羅とある。おい天麩羅を待つてこいと大きな聲を出した。すると此時迄隅の方に三人かたまつて、何かつる／＼ちゆ／＼食つてた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、一寸氣がつかなくなつたが顔を合せると、みんな學校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。其晩は久し振りに蕎麥を食つたの

で、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の氣もなく教場へ這入ると、黑板一杯位な字で天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てもみなわあつと笑つた。おれは馬鹿々々しいから、天麩羅を食つちや可笑いかと聞いた。すると生徒の一人が、然し四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食はうが五杯食はうが、おれの錢でおれが食ふのに文句があるもんかと、さつさと、講義を濟まして控所へ歸つて來た。十分立つて次の教場へ出るこいつ天麩羅四杯也、但し笑ふ可らず。と黑板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癢に障つた。冗談も度を過せばいたづらだ焼餅の黒焦の様なものでも誰も賞め手はない。田舎者は此呼吸が分らないからどこまで押して行つても構はないと云ふ量見だらう。一時間あるくと見物する町もない様な狭い都に住んで、外に何にも藝がないから天麩羅事件を日露戦争の

三三  
様に觸れちらかすんだらう。憐れな奴等だ。子供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢の楓見た様な小人が出来るんだ。無邪氣なら一所に笑つてもいゝが、こりやなんだ。子供の癖に乙に毒氣を持つてゐるおれはだまつて、天麩羅を消して、こないたづらが面白いが、卑怯な冗談だ君等は卑怯と云ふ意味を知つてゐるか、と云つたら、自分がした事を笑はれて怒るのが卑怯ぢやらうがな、もし答へた奴がある。いやな奴だ。わざ／＼東京からこんな奴を教へに來たのかと思つたら情なくなつた。餘計な減らす口を利かないで勉強しろと云つて授業を始めて仕舞つた。夫れから次の教場へ出たら天麩羅を食ふと減らす口が利き度なるものなりと書いてある。さうも始末に終へない。あんまり腹が立つたから、そんな生意氣な奴は教へないと云つてすたすた歸つて來てやつた。生徒は休みになつて喜んださうだ。かうなると學校よ

り骨董の方がまだましだ。

印象 ボールドに向つて、眼の玉をいら／＼させて居る坊つちやんの姿が眼に見えるぢやないか。

四

彼は教頭野矢の赤  
シヤツの野矢の赤  
教師の野矢の赤  
いふ男の野矢の赤  
けたから野矢の赤  
二人から野矢の赤  
隙して居るも  
さし居るも  
のがあるか  
ら云つたか  
ら云つたか  
彼は誰

野だは大嫌だ。こんな奴は澤庵石をつけて海の底へ沈めちまふ方が日本の爲だ。赤シヤツは聲が氣に食はない。あれは持前の聲をわざと氣取つてあんな優しい様に見せてるんだらう。いくら氣取つたつて、あの面ぢや駄目だ。惚れるものがあつたつてアドナ位なものだ。然し教頭丈に野だより六づかしい事を云ふ。うちへ歸つて、彼奴の申し條を考へて見ると一應尤もの様でもある。判然とした事は云はないから、見當がつかかねるが、何でも山嵐がよくない奴だ

坊つちやん

れださ訊く  
から今に分る  
てからと云つ  
れな敬へてく  
なかつた。

三二四  
から用心しろと云ふのらしい。それならさうと確乎断言するがよい、男らしくもない。さうして、そんな悪い教師なら、早く免職したらよからう。教頭なんて文學士の癖に意氣地のないもんだ。蔭口をきくのでさへ、公然と名前が云へない位な男だから、弱虫に極まつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女の様な親切ものなんだらう。親切は親切、聲は聲だから、聲が氣に入らないつて、親切を無にしちや筋が違ふ。夫にしても世の中は不思議なものだ。虫の好かない奴が親切で、氣の合つた友達が悪漢だなんて。馬鹿にして居る。六方田舎だから萬事東京のさかに行くんだらう。物騒な所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐になるかも知れない。然し、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたづらをしさうもないがな。一番人望のある教師だと云ふから大抵の事は出来るかも知れない、——が第一そんな廻りくどい事をしないで、ちかに

おれを捕へて喧嘩を吹き懸けりや手数が省ける譯だ。おれが邪魔になるなら、實は是々だ。邪魔だから辭職してくれと云や、よさうなもんだ。物は相談づくでさうでもなる。向ふの云ひ條が尤もなら明日にでも辭職してやる。こゝ許米が出来る譯でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしない積だ。山嵐も餘程話せない奴だな。

こゝへ來た時第一に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢つてもらつちや、おれの顔に關はる。おれはたつた一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか拂はしちやない。然し一錢だらうが五厘だらうが、詐欺師の恩になつては、死ぬ迄心持がよくない。あした學校へ行つたら、一錢五厘返して置かう。おれは清から三圓借りて居る。其參圓は五年経つた今日もまだ返さない。返せないんぢやない、返さないんだ。清は今に返すだらう杯と、苟

坊つちやん







もじ

「へえ、不思議なものですね、あのうらない君が、そんな艶福のある男とは思はなかつた。人は見懸けによらない者だな。ちと氣を付けやう」

「所が、去年あすこの御父さんが御亡くなりで、夫迄は御金もあるし、銀行の株も持つて御出るし、萬事都合がよかつたのぢやが——夫からと云ふものは、さう云ふものか急に暮し向きが思はしくなつて——詰り古賀さんがあまり御人が好過ぎるけれ、御欺さんたんでなもし。それやこれやで御輿入も延びて居る所へ、あの教頭さんが御出で、是非御嫁にほしいと御云ひるのぢやがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひさい奴が。どうもあのシャツは只のシャツぢやないと思つてた。それから？」

三二〇

「人を頼んで掛合ふて見ると、遠山さんでも古賀さんと義理があるから、すぐ返事は出来かねて——まあよう考へて見やう位の挨拶をしたのぢやなもし、すると赤シャツが、手蔓を求めて遠山さんの方へ出入をおしる様になつて、とうとうあなた、御嬢さんを手馴付けてお仕舞ひたのぢやがなもし、赤シャツさんも赤シャツさんぢやが、御嬢さんも御嬢さんぢやて、みんなが悪く云ひますのよ。一旦古賀さんへ嫁に行くて、承知しときながら、今更學士さんが御出たけれ、其方へ替えよて、それぢや今日様へ濟むまいがなもし、あなた」

「全く濟まないね、今日様所か明日様にも明後日様にも、いつ迄行つたつて濟みつこありませんね」

「夫で古賀さんに御氣の毒ぢやて、御友達の堀田さんが教頭の所へ意見しに御行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りする積はない破

坊つちやん

三二一

約になれば貰ふかも知れんが、今の所は遠山家と只交際をして居る許りぢや、遠山家と交際をするには別段古賀さんに濟まん事もなからうと御云ひるけれど、堀田さんも仕方がなしに御戻りださうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以來折合がわるいと云ふ評判でなもし』

『よく色々な事を知つてますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちまつた』

『狭いけれども分りますでなもし』

分り過ぎて困る位だ。此容子ぢやおれの天麩羅や團子の事も知つてるかも知れない。厄介な所だ然し御蔭様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大に後學になつた。只困るのはどつちが悪る者だか判然しない。おれのような單純なものには白とか黒とか片づけて貰はないと、どつちへ味

方をしていゝか分らない。

『赤シャツと山嵐たあ、どつちがいゝ人ですかね』

『山嵐て何でなもし』

『山嵐云ふのは堀田の事です』

『そりや悪事は堀田さんの方が強さうぢやけれど、然し赤シャツさんは學士さんぢやけれ働らきはある方だなもし。夫から優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がえゝといふでなもし』

『つまり月給の多い方が豪いのぢやらうなもし』

印象 赤シャツのぎんな男だか、堀田のいかに好人物だか、あらはに窺はれるではないか。



てやつたら定めて驚く事だらう。箱根の向だから化物が寄り合てるんだと云ふ  
かも知れない。

おれは性來構はない性分だからどんな事でも苦にしないで今日迄淡いで来た  
のだが、此所へ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを  
物騒に思ひ出した。別段際だつた大事件にも出逢はないのに五つ六つ年取つた  
様な気がする。早く切り上げて東京へ歸るのが一番よからう。杯と夫から夫へ  
と考へて、いつか石橋を渡つて野芹川の堤へ出て。川と云ふとえらさうだが實  
は一間位な、ちよろ／＼した儘で、土手に沿ふて十二丁程下ると相生村へ出る  
村には觀音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかまやいて居る。太鼓が  
鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れば浅いけれも早いから、神経質の水の様

にやたらに光る。ぶら／＼土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら  
向ふに人影が見え出した。月に透かして見ると影は二つある。温泉へ来て村へ  
歸る若い衆かも知れない。夫れにしては唄もうたはない。存外静だ。

段々歩行いて行くと、おれの方が早足と見えて、二つの影法師が、次第に大  
きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間位の距離に逼つた  
時、男が忽ち振り向いた。月は後からさして居る。其時おれは男の様子を見て  
はてなと思つた。男と女は又元の通りにあるき出した。おれは考があるから、  
急に全速力で追懸けた。先方は何の氣もつかずに最初の通り、ゆる／＼歩を移  
して居る。今は話し聲も手に取る様に聞える。土手の幅は六尺位だから、並  
んで行けば三人が漸くだ。おれは苦もなく後ろから追付いて、男の袖を擦り抜  
けさき、二足前へ出した腫をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面か

體操の教師が  
器めさせられ  
た時、これに  
赤シャツと野

だいたいこの仕事  
操の教師は對  
し、自から辭職  
の覺悟で、野赤  
シヤツと野赤  
めてやとつち  
めてやとつち  
の宿例の温泉  
居た。

三六  
らあれの五分刈の頭から顎の廻り迄、會釋もなく照す。男はあつと小聲に云つたが、急に横を向いて、もう歸らうと女を促すが早い温泉の町の方へ引き返した。

赤シャツは圖太くて胡魔化す積か、氣が弱くて名乗り損なつたのかしら。所が狭くて困つてるのは、おれ許りではなかつた。

印象 坊つちやんに認められて、はつと驚いて慌てるやうに逃げて行く赤シャツが思はれる。

七

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあごを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下迄あるかなければならない。温泉の町は

づれると一丁許りの杉並木があつて、左右は田圃になる。それを通りこすところか、こかしこに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さへはづれ、ば、どこで追付いても構はないが、可成なら人家のない、杉並木で捕へてやらうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に馳け足の姿勢ではやての様に後から追ひついた。何が来たかと驚いて振向く奴を、待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽の氣味で逃げ出さうと云ふ景色だつたから、おれが前へ廻つて行手を塞いで仕舞つた。

「教頭の職をもつてゐるものが何で角屋へ行つて泊つた」と山嵐は詰りかけた  
「教頭は角屋へ泊つて悪いと云ふ規則がありますか」と赤シャツは依然として鄭重な言葉を使つてる。顔の色は少し蒼い。

「取締 上不都合だから、蕎麥屋や團子屋へさへ這入つて行かんと、云ふ位謹坊つちやん

直な人がなぜ藝者と一所に宿屋へ泊り込んだ」野だは隙を見ては逃げ出さうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて『べちんめいの坊ちゃんごは何だ』と奴鳴り付けたら『いえ君の事を云つたんぢやないんです。全くないんです』とは面皮に言譯がましい事をぬかした。おれは此時氣が付いて見たら兩手で自分の袂を握つてる。追つかける時袂の中の卵がぶら／＼して困るから兩手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂に手を入れて、王子を二つ取り出してやつと云ひながら野だの面へ擲き付けた。王子はがちやりと破れて鼻の先から黄味がだらりと流れ出した。野だは餘程仰天したものと見えて、わつと言ひながら、尻持をついて助けてくれと云つた。おれは食ふ爲に王子は買ったが、打付ける爲に袂に入れてる譯ではない。只肝癪のあまりにぶつ／＼けるともなしに打つけて仕舞つたのだ。然し野だが尻持をついた所を見て始めておれの成功し

た事に氣がついたから、此畜生、此畜生といひながら残る六つを無茶苦茶に擲き付けたら、野だは顔中黄色になつた。

おれが王子をたゞきつけてゐるうち、山嵐と赤シヤチはまだ談判最中である「藝者を連れて僕が宿屋へ這入つたと云ふ證據がありますか」

「宵に貴様のなじみの藝者が角屋へ這入つたのを見て云ふ事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は古川君と二人で泊つたのである。藝者が宵に這入らうが、這入るまいが、僕の知つた事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨を食はした。赤シヤチはよろ／＼したが『是は亂暴だ狼籍である。是非を辨じないで腕力に訴へるのは無法だ』

『無法で澤山だ』とまたほかりと撲ぐる。貴様の様な奸物はなぐらなくつちや

答へないんだ』とほか／＼なぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据ゑた。仕舞には二人とも杉の根方にうづくまつて動けないのか、眼がちら／＼するのかわ逃げ様ともしない。

『もう澤山か、澤山でなけりや、まだ撲つてやる』とほか／＼と兩人でなぐつたら『もう澤山だ』と云つた。野だに『貴様も澤山か』と聞いたら『無論澤山だ』と答へた。

『貴様等は奸物だから、かうやつて天誅を加へるんだ。これに懲りて以來つゝしむがいゝ、いくら言葉巧みに辯解が立つても正義は許さんぞ』と山嵐が云つたら兩人共だまつてゐた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。

『おれは逃げも隠れもせん。今夜五時迄は濱の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ』と山嵐は云ふから、おれも『おれも逃げも隠れもしないで堀田と同じ處に待つてるから警察へ訴へたければ勝手に訴へろ』と云つて二人してすた／＼あるき出した。

印象 坊つちやんも、これでやつと三斗の溜飲をさけることが出来たのだらう。

宗近は、斯う  
もしたら甲野  
のむしくしや  
がされるだら  
うか、京都  
へ誘ひ出し  
た。叡山に上つ

## 六 虞美人草

考へるともなく考へた甲野君は漸くに身を起した。又歩行かねばならぬ。見たくもない叡山を見て、入らざる豆の數々に、役にも立たぬ登山の痕迹を、二三日が程は、苦しき記念を残さねばならぬ。苦しき記念が必要ならば數へて白頭に至つて盡きぬ程ある。裂いて髓に入つて消えぬ程ある。いたづらの足の底に膨れ上る豆の十や二十——と切り石の鋭き上に半ば掛けたる編み上げの踵を見下す途端、石はきりりと面を更へて、乗せかけた足をすはと云ふ間に二尺程滑べらした。甲野さんは

『萬里の道を見ず』

と小聲に吟じながら、傘を力に、艮道を登ると、急に折れた胸突坂が、下から來る人を天に誘ふ風情で帽に逼つて立つて居る。甲野さんは眞麻を煽つて坂の下から眞一文字に坂の盡きる頂きを見上げた。坂の盡きた頂きから、淡きうち

に限りなき春の色を漲らしたる果もなき空を見上げた。甲野さんは此時

『萬里の天を見る』

と第二の句を、同じく小聲に歌つた。

草山に登り詰めて、雑木の間を四五段上ると、急に肩から暗くなつて、踏む靴の底が、濕つほく思はれる。路は山の脊を、西から東へ渡して、忽ちのうちに草を失うとすぐ森に移つたのである。近江の空を深く色ざる此森の、動かねば、その上の幹と、その上の枝が、幾重幾重に連なりて、昔ながらの翠りを年毎に黒く疊むと見える。二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧



を埋めて、猶餘りある葉裏に、三藐三菩提の佛達を埋め盡して、森々半空に聳ゆるは、傳教大師以來の杉である。甲野さんは只一人此杉の下を通る。

右よりし左よりして、行く人を兩手に遮る杉の根は、土を深く地盤に食ひ入るのみか、餘る力に、跳ね返して暗き道を、二寸の高さに段々と横切て居る登らんとする岩の梯子に、自然の枕木を敷いて、踏み心地よき幾級の階を、山靈の賜と甲野さんは息を切らして上つて行く。

行く路の杉に通つて、暗きより洩るゝが如く這ひ出づる日影蔓の、足に纏はる程に繁きを越せば、引かれたる蔓の長きを傳はつて、手も届かぬに、朽ちかかる齒朶の、風なき晝をふらくと揺く。

「此處だ、此處だ」

と宗近君が急に頭の上で天狗の様な聲を出す。朽草の土なる迄積み古るした

る上を、踏めば深靴を隠す程に踏み答へもなきに、甲野さんは漸くの思で蝙蝠傘を力に、天狗の座まで、登つて行く。

「善哉々々、われ汝を待つ事こゝに久しだ。全體何を愚圖々々して居たのだ」

甲野さんは只あゝと云つた許りで、いきなり蝙蝠傘を放り出すと、其上へとざりと尻餅を突いた。

「又反吐か、反吐を吐く前に、一寸あの景色を見なさい。あれを見ると折角の反吐も残念ながら收まつちまふ」

と例の櫻の枝で、杉の間を指す。夫を封する老幹の亭々と行儀よく並ぶ隙間に的礫近江の湖が光つた。

「成程」と甲野さんは眸を凝らす。

鏡を延べたと許りでは飽き足らぬ。琵琶の銘ある鏡の明かなるを忌んで、數

山の天狗共が、宵に偷んだ神酒の酔に乗じて曇れる氣息を一面に吹き掛けた様に——光るものゝ底に沈んだ上には、野と山にはびこる陽炎を巨人の繪の具皿にあつめて、只一刷に抹り付けた激澁たる春色が、十里の外に模糊と押引いて居る。

『成程』と甲野さんは又繰り出した。

印象 叡山の景が眼前に展べられたやうだ。そして其處を辿り行く二人の姿が見える。

二

二人は四邊の景色を賞しながら上つた。

紅を彌生に包む晝酣なるに、春を抽んずる紫の濃き一點を、天地の眠れるなかに鮮やかに 滴たらしたるが如き女である。夢の世を夢よりも艶に眺め

しむる黒髪を、亂るゝなと曇める鬢の上には、玉虫貝を研々と董に刻んで細き金脚にはつしと打込んで居る。静かなる晝の、遠き世に心を奪ひ去らんとする、黒き眸のさと動けば、見る人は、あなやと我に歸る、半滴のひろがりに、一瞬の短きを偷んで、疾風の威を作すは、春に居て春を制する深き眼である。此瞳を溯つて、魔力の境を窮むるとき、桃源に骨を白うして再び塵寰に歸するを得ず。只の夢ではない。模糊たる夢の大なるうちに、燦たる一點の妖星が死ぬる迄我を見よと、紫色の、眉近く逼るのである。女は紫色の着物を着て居る。

静かなる晝を、静かに葉を抽いて、箔に重き一卷を、女は膝の上に讀む。

『墓の前に 跪いて云ふ。此手にて——此手にて君を埋め参らせしを、今は此手も自由ならず。捕はれて遠き國に、行く程もあらねば、此手にて君が墓を掃

ひ、此手にて香を焚くべき折々の、長しへに盡きたりと思ひ給へ、生ける時は莫耶も我等を割き難きに、死こそ無惨なれ、羅馬の看は埃及に葬られ、埃及なるわれは、君が羅馬に埋められんとす。君が羅馬——はわが思ふ程の恩を、憂きわれに拒める、君が羅馬は、つれなき君が羅馬なり。去れど、情だにあらば羅馬の神は、よもや生きながらの辱に、市に引かるゝわれを、雲の上より餘處に見給はざるべし、君が仇なる人の勝利を飾るわれを、埃及の神に見離されたるわれを、君が片身と残し給へるわが命こそ仇なれ。情ある羅馬の神に祈る。

——われを隠し給へ。恥見えぬ墓の底に、君とわれを永劫に隠し給へ。』

女は顔を上げた。蒼白き頬の縮れるに、薄き化粧をほのかに浮かせるは、一重の底に、餘れる何物かを藏せるが如く、藏せるものを見極はめんとあせる男は悉く虜となる。男は眩けに半ば口元を動かした。口の居住の崩るゝ時、此

人の意志は既に相手の餌食とならねばならぬ。下唇のわざとらしく色めいて然かも判然と口を切りぬ間に、切り付けられたるものは必ず受け損ふ。

女は唯隼の空を搏つが如くちらと眸を動かしたのみである。男はにや／＼と笑つた。勝負は既に付いた。舌を顎頭に飛ばして、泡吹く蟹と、烏鷺を争ふは策の尤も拙なきものである。凡勳鼓行して、已むなく城下の誓をなさしむるは策の尤も凡なるものである。蜜を含んで針を吹き、酒を強いて毒を盛るは策の未だ至らざるものである。最上の戦ひには一語をも交ふる事を許さぬ、拈華の一撈は、此を去る八千里ならざるも、遂に不言にして又不語である。只躊躇する事刹那なるに、虚をうつ悪魔は、思ふ壺に迷と書き、惑と書き、失はれたる人の子と、書いて、すはと云ふ間に引き上げる。下界萬丈の鬼火に腥さき青燦を筆の穂に吹いて、會釋もなく描き出せる文字は、白髪をたわしにして洗つ

ても容易くは消えぬ。笑つたが最後、男は此の笑を引き戻す譯には行くまい。  
 『小野さん』と女が呼びかけた。  
 『え？』とすぐ應じた男は、崩れた口元を立て直す暇もない、唇に笑を帯びたのは、半ば無意識にあらはれたる、心の波を、手持無沙汰に草書に崩した迄であつて、崩したものの盡きんとする間に、崩すべき第二の波の來ぬのを煩つて居る折であるから、渡りに船の『え？』は心安く咽喉を滑り出たのである。女は固より曲物である。『え？』と云はせた儘、しばらくは何にも云はぬ。  
 印象 恍惚焉として、人を惱殺する體の美しい女が、まさぐと眼に浮いて來るではないか。

甲野と後妻と  
 の間はさか  
 丸く行かなか  
 つた。後妻は、  
 自分の腹を痛  
 めた娘の藤尾  
 に嫁なごつて  
 甲野家を繼が  
 せやうとして  
 居るの、ど  
 うも家の中  
 面白く行か  
 かつ。

甲野さんは妙な顔をして宗近君を見た。  
 疑へば己にさへ欺かれる。況して己以外の人間の、利害の衝に、損失の塵除と被る面の厚さは、容易には度られぬ。親しき友のわが母を、さうと評するのは、面の内側で評するのか、又は外側でのみ云ふ了見か。己にさへ己を欺く魔の、どこにか潜んで居る様な氣持は免かれぬものを、無二の友達とは云へ、父方の縁續きとは云へ、迂闊には天機を洩らし難い。宗近の言は繼母に對するわが心の底を見んの鎌か、見た上でも元の宗近ならば夫迄であるが、鎌を懸ける程の男ならば、思ふ通りを引き出した後で、どう引つ繰り返らぬとも保証は出來ん、宗近の言は眞率なる彼の、裏表の見界なく、母の口占を一圖にそれと信じたる反響か。平生の彼是から推して見ると多分さうだらう。よもや、母から頼まれて、曇る胸の、われにさへ恐ろしき淵の底に、詮索の錘を投げ込む様な

卑劣な振舞はしまし、けれども、正直な者程人には使はれ易い。卑劣と知つて人の手先にはならんでも、われに對する好意から見損つた母の意を承けて、御邊に面白からぬ結果を、必然の期程以前に、家庭のなかに打ち開ける事がないさも限らん。何れにしても入らぬ口は發くまい。

二人は暫く無言である。隣家では琴を弾いてゐる。

『あの琴は生田流がな』と甲野さんは東かぬ事を聞く。

『寒くなつた、狐の袖無でも着やう』と宗近君も付かぬ事を云ふ。二人は離れ離れに口を發いて居る。

丹前の胸を開いて、違棚の上から、例の異様な胴衣を取り下ろして、體を斜に腕を通した時、甲野さんは聞いた。

『其袖無は手製か』

『うん、皮は支那に行つた友人から貰つたんだがね、表は糸公が着けて呉れた』  
『本物だ、旨いもんだ。お糸さんは藤尾なんぞと違つて實用的に出來てゐるか  
らい』

『いゝか。ふん。彼奴が嫁に行くと少々困るね』

『いゝ嫁の口はないかい』

『嫁の口か』と宗近君は一寸甲野さんを見たが、氣の乗らない調子で『無い事もないが……』とだらりと言葉の尾を垂れた。

甲野さんは問題を轉じた。

『お糸さんが嫁に行くと御叔父さんも困るね』

『困つたつて仕方がない。どうせ何時か困るんだもの——夫よりか君は女房を  
貰はないのかい』

「僕か……だつて……食はず事が出来ないもの」

「だから御母さんの云ふ通りに君が家を襲いで——」

「夫りや駄目だよ。母が何と云つたつて。僕は厭なんだ。」

「妙だね、どうも。君が判然しないもんだから、藤尾さんも嫁に行かれないんだらう」

「行かれないんぢやない、行かないんだ」

宗近君はだまつて鼻をびくつかせてゐる。

「鱧を食はせるな。毎日鱧許り食つて腹の中が小骨だらけだ。京都と云ふ所は實に愚な所だ。もういゝ加減に歸らうぢやないか」

「歸つてもいゝ、鱧位なら歸らなくつてもいゝ。然し君の嗅覺は非常に鋭敏だね。鱧の臭がするかい」

「するぢやないか。臺所でしきりに焼いてゐらあね」

「其位虫が知らせると阿爺も外國で死ななくつても濟んだかも知れない。阿爺は嗅覺が鈍かつたと見える」

「ハ、ハ、ハ、時に御叔父さんの遺物はもう着いたか知ら」

「もう着いた時分だね。公使館の佐伯と云ふ人が持つて来て呉る筈だ。——何にもないだらう——書物が少しあるかな」

「例の時計はさうしたらう」

「さうく。倫敦で買った自慢の時計か。あれは多分來るだらう。子供の時から藤尾の玩具になつた時計だ。あれを持つと中々離さなかつたもんだ。あの鍵に着いて居る石榴石が氣に入つてね」

「考へると古い時計だね」

「さうだらう、阿爺が始めて洋行した時に買ったんだから」

「あれを御叔父さんの形見に僕に呉れ」

「僕もさう思つて居た」

「御叔父さんが今度洋行するときね、歸つたら卒業祝にこれをお前にやらうと約束して行つたんだよ」

「僕も覚えてゐる。——ことによると今頃は藤尾が取つて又玩具にしてゐるかも知れないが……」

「藤尾さんとあの時計は到底離せないか。ハ、ハ、ハ、なに構はない、夫でも貰はう」

甲野さんは、だまつて宗近君の眉の間を。長い事見て居た。御晝の膳の上には宗近君の豫言通り鱧が出た。

印象 静かな京都の空を仰ぎながら、互に胸を開いて語り合つて居る二人の姿が見える。

四

半世の歴史を長き穂の心細き迄逆しまに尋ねれば、溯る程に暗澹となる。芽を吹く今の幹なれば、通はぬ脈の枯枝の末に、錐の力の尖れるを幸ひと、記憶の命を突透すは要なしと云はんより寧ろ無惨である。ジエーナスの神は二つの顔に、後ろをも前をも見る。幸なる小野さんは一つの顔しか持たぬ。背を過去に向けた上は、眼に映るは烈々たる前程のみである。後を向けばひゆうと北風が吹く。此寒い所をやつとの思ひで斬り抜けた昨日今日、寒い所から、寒いものが追つ懸けて来る。今迄は只忘れゝばよかつた。未來の發展の暖かく鮮や

小野は、孤堂先生から、紙を見たら、博覧會騒ぎで、混雑するから、き拂つて、東京へ行くので、たなごゝあつた。

かなるうちに、己れを捲き込んで、一步でも過去を遠退けば夫で済んだ。生きて居る過去も、死んだ過去のうちに静かに鏝られて、動くかとは懸念しながらも、先づ大丈夫だらうと、其日、其日に立ち退いては、願みるパノラマの長く連なる丈で、一點も動かぬに胸を撫で居た。所が昔ながらと高を括つて、過去の管を今更覗いて見ると――動くものがある。われは過去を棄てんとしつゝあるに、過去はわれに近付いて来る。逼つて来る静なる前後と枯盡したる左右を乗り越えて、暗夜を照す提灯の火の如く揺れて来る。動いてくる。小野さんは部屋の中を廻り始めた。

自然は自然を用ひ盡さぬ。極まらんとする前に何事か起る。單調は自然の敵である。小野さんが部屋の中を廻り始めて半分と立たぬうちに、障子から下女の首が出た。

「お客様」と笑ひながら云ふ。何故笑ふのか要領を得ぬ。御早うと云つて笑ひ御歸んなさいと云つては笑ひ、御飯ですと云つては笑ふ。人を見て妄りに笑ふものは必ず人に求むる所のある證據である。此下女は慥かに小野さんからある報酬を求めて居る。

小野さんは氣のない顔をして下女を見たのである。

下女は失望した。

「通しませうか」

小野さんは「え、うん」と判然しない返事をする。下女は又失望した。下女が無暗に笑ふのは小野さんに愛嬌があるからである。愛嬌のない御客は下女から見ると半文の價値もない。小野さんは此心理を心得てゐる。今日迄下女の人望を繋いだのも全く此自覺に基く、小野さんは下女の人望をさへ妄りに落す事



を好まぬ程の人物である。

同一の空間は二物によつて同時に占有せらるゝ事能はずと昔の哲學者が云た  
愛嬌と不安が同時に小野さんの脳髓に宿る事は此哲學者の發明に反する。愛嬌  
が退いて不安が這入る。下女は悪い所へ打つかつた。愛嬌が退いて不安が這入  
る。愛嬌が附焼双で不安が本體だと思ふのは偽哲學者である。家主が這入るに  
就いて、愛嬌が示談の上、不安に借家を譲り渡した迄である。夫にしても小野  
さんは悪い所を下女に見られた。

『通してもいゝんですか』

『うん、さうさね』

『御留守だつて云ひませうか』

『誰だい』

『浅井さん』

『浅井か』

『御留守?』

『さうさね』

『御留守になさいますか』

『さう、しやうか知ら』

『ごつちでも』

『逢はうかね』

『ちや通しましやう』

『おら一寸、待つた。おら』

『何です』

宗近と甲野は  
夢想國師の建  
立した寺を見

てから、保津  
川下りをやる  
ことになつ

『あゝ、好い。好しく』

友達には逢ひたい時と、逢ひ度ない時とある。それが判然すれば何の苦もな  
い。いやなら留守を使へば済む。小野さんは先方の感情を害さぬ限りは留守を  
使ふ勇氣のある男である。只困るのは逢ひたくもあり、逢ひ度もなくて、前へ  
行つたり後ろへ戻つたりして下女に迄馬鹿にされる時である。

印象 逢はうか、逢うまいかと心を決しかねて立つて居る小野と、何方と  
も決めよと促すやうな下女の姿とが見える。

五

ぎい／＼と權が鳴る。粗削りに平けたる檜の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘  
る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむんづと握る便りである。握る手の節

の隆きは、眞黒きは、松の小枝に首筋立て、うんと掻く力の脈を通はせた様に  
見える。藤蔓に頸根を抑へられた權が、掻く毎に撓りでもする事か、強き頂を  
眞直に立てた儘、藏蔓と擦れ、舷と擦れる。權は一振毎にぎい／＼と鳴る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停まる暇なきに、前へ前へ送る  
重なる水の蹙つて行く、頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。  
通りたれば、已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思  
へば舟は早くも山城に入る。保津の瀬は是からである。

『愈來たぜ』と宗近君は船頭の體を透して岩と岩の通る間を半町の向ふに見  
る。水はさうと鳴る。

『成程』と甲野さんが舷から首を出した時、船ははや瀬の中に滑り込んだ。  
右側の二人はすはと波を切る手を緩める。權は流れて舷に着く。舳に立つは

竿を横たへた瀬である。傾いて矢の如く下る船は、どよよと刻み足に、船に据えた尻に響く。壊れるなと気が付いた時は、もう走る瀬を抜けだしてゐた。

『あれだ』と宗近君が指さす後を見ると、白い泡が一町ばかり、逆落しに噴み合つて、谷を洩る微かな日影を萬顆の珠と我勝に奪ひ合つてゐる。

『壯んなものだ』と宗近君は大いに御意に入つた。

『夢窓國師とどつちがい』

『夢窓國師より此方の方がえらい様だ』

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の、落ちんとして、落ちざるを、苦にせぬ様に、櫂を動かし來り、棹を操り去る。通る瀬は様々に廻る。廻る毎に新たな山は當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數ふる邊を行客に許さざる疾き流れは、船を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな丸い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に、撃ち付けて散る水沫を、春寒く腰から浴びる、縁崩るゝ真中に舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一圖に此大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向ふは見えず。削られて坂と落つる川底の深さは幾段か、乗る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突き當つて碎けるか、捲き込まれて見えぬ。彼方にごつと落ちて行くか、——舟は只まともに進む。

『當るぜ』と宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は、はやくも船頭の黒い頭を壓して突つ立つた。船頭は『うん』と舳に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢ひに、波を呑む岩の太腹に潛り込む。横たへた竿は取り直されて、肩より高く兩の手が揚がると共に舟はぐうと廻つた。此獸奴と突き離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜めに滑つて、舟は向ふへ落ち出した。

『どうしても夢窓國師より上等だ』と宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落ち盡すと向から空舟が上つてくる。竿も使はねば、櫂は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳が収めて、肩から斜めに目暗縞を掠めた。細引繩に、長々と谷間傳ひを根限り戻り舟を牽いて来る。水行く外に尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を石に飛び、岩に這ふて、穿く草鞋の減り込む迄腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は塞がれて注ぐ渦の中に指先を浸す許りである。うんと踏ん張る幾世の金剛力に、岩は自然と握り減つて、引き懸けて行く足の裏を、安々こ受ける段々もある。長い竹を此處、彼處と、岩の上に渡したのは牽綱をわが勢ひに逆はぬ程に、疾く滑らす爲めの、策と云ふ。

『少しは穩かになつたね』甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ屹つ立つた山の遙の上に、波の音が丁々とする黒い影は空高く動く。

印象 保津川の四邊の景や、そこの急湍を下る舟のさまが見える。

六

宗近君の甲野は  
東京へ先中  
で孤堂の先生  
さそひに娘の  
夜子に合は  
した「そしは  
夜小は斯う  
いふ女子だつ

色白く、傾く月の影に生れて小夜と云ふ。母なきを、つとまやかに暮す親子一人の京の住居に、孟蘭盆の燈籠を掛けてより五遍になる。今年の秋は久し振りで、亡き母の精霊を、東京の葎鼓で迎へる事と、長袖の左右に開くなから、白い手を尋常に重ねてゐる。物の憐れは小さき人の肩にあつまる。乗じ掛る怒りは、撫で下す絹しなやかに情の裾に滑り込む。

紫に驕るものは招く、黄に深く情濃きものは追ふ。東西の春は二百里の鐵路に連なるを、願の糸の一筋に、戀こそ誠なれと、髪に掛けたる丈長を顛はせながら、長き夜を縫ふて走る。古き五年は夢である。只滴たる繪筆の勢に、

虞美人草

有耶無耶を貫いて、赫々と染めつけられた昔の夢は、深く記憶の底に透つて、  
當時を裏返す折々にさへ鮮かに煮染んで見える。小夜子の夢は命よりも明かである。小夜子は此明かなる夢を、春寒の懐に暖めつゝ、黒く動く一條の車に載せて東に行く。車は夢を載せた儘ひたすらに、只東へと走る。夢を携へたる人は、落すまじと、ひしと燃ゆるものを抱きしめて行く。車は無二無三に走る野には緑を衝き、山には雲を衝き、星ある程の夢には星を衝いて走る。夢を抱く人は、抱きながら、走りながら、明かなる夢を暗闇の遠きより切り放して、現實の前に投げ出さんとしつゝある。車の走る毎に夢と現實の間は近づいてくる。小夜子の旅は明かなる夢と明かなる現實がはたと行き逢ふて區別なき境に至つて已む。夜はまだ深い。

隣に腰を掛けた孤堂先生は左程に大事な夢を持つて居らぬ。日毎に頭の下に

白くなる疎髻を握つては昔しを思ひ出さうとする。昔しは二十年の奥に引縮つて容易には出て来ない。漠々たる紅葉のなかに何やら動いて居る。人か犬か草かそれすらも判然せぬ。人の過去は人と犬と木と草との區別がつかぬ様になつて始めて眞の過去となる。戀々たるわれを、つれなく見捨て去る當時に未練があればあるほご、人も犬も木も草も滅茶苦茶である。孤堂先生は胡麻鹽交りの髻をぐいと引いた。

「御前が京都へ来たのは幾歳の時だつたかな」

「學校を廢めてから、すぐですから、丁度十六の春でせう」

「すると、今年で何年だね……」

「五年目です」

「さう五年になるね。早いものだ、つい此間の様に思つて居たが」と又髻を引

つ張つた。

「来た時に嵐山へ連れていつて頂いたでせう。御母さんと一所に」

「さうく、あの時は花がまだ早過ぎたね。あの時分から思ふと嵐山も大分變つたよ。名物の團子もまだ出来なかつた様だ」

「いえ御團子はありましたわ。そら三軒茶屋の傍で喫ちやありませんか」

「さうかね、能く覚えて居ないよ」

「ほら、小野さんが青いの許り食べるつて、御笑ひなすつたちやありませんか」

「成程あの時分は小野が居たね。御母さんも丈夫だつたがな。あゝ早く亡くならうとは思はなかつたよ。人間程分らんものはない。小野も夫から大分變つたらう。何しろ五年も逢はないんだから……」

「でも大丈夫だから結構ですわ」

「さうさ京都へ来てから大變丈夫になつた。来た時は随分蒼い顔をしてたね、さうして何だか始終をさくして居た様だが、馴れると段々平氣になつて」

「性質が柔和いんですよ」

「柔和いんだよ、柔和過ぎるよ、——でも卒業の成績が優等で銀時計を頂戴して、まあ結構だ。——人の世話にするもんだね。あゝ云ふ性質の好い男でさ、あの儘放つて置けば夫れ限り、何處へどう這入つて仕舞ふか分らない」

「本當にね」

**印象** 楽しい望みを東京の空にかけて、五年間住み馴れた京都を後に、親子一人の親子づれの旅の楽しさが思はれる。

小夜子は、五年ぶりで、野向きになつて語り合つた。

七

細い面を一寸奥へ引いて、上眼に相手の様子を見る。さうしても五年前とは變つてゐる。——眼鏡は金に變つてゐる。久留米紆は脊廣に變つてゐる。五分刈は光澤ある毛に變つてゐる。——髻は一躍して紳士の域に上る。小野さんは何時の間にもやら黒いものを蓄へてゐる。もとの書生ではない。襟は卸し立である。飾りには留針さへ肩を動かす度に光る。鼠の勝つた品の好い胸衣の隠袋には——恩賜の時計が這入つてゐる。此上に金時計をとほ、小さき胸の小夜子が夢にだにも知る筈がない。小野さんは變つてゐる。五年の間一日一夜も懐に忘れられぬ命より明かな夢の中なる小野さんはこんなではなかつた。五年は昔である。東西長短の袂を分つて、離愁を鎖す暮

雲に相思の關を塞かれては、逢ふ事の疎くなりまざる此年月を、變らぬとのみは思ひも寄らぬ、風吹けば變る事と思ひ、雨降れば變る事と思ひ、月に花に變る事と思ひ暮してゐた。然し、かうは變るまいと念じてブラット、フォームへ下りた。

小野さんの變りかたは過去を順當に延ばして、健氣に生ひ立つた阿蒙の變りかたではない。色の褪めた過去を逆に捻ぢ伏せて、目醒しき現在を、相手が新橋へ着く前の晩に、性急に拵へ上げた様な變りかたである。小夜子には寄付けぬ。手を延ばしても届きさうにない。變りたくても變られぬ自分が恨めしい氣になる。小野さんは自分と遠ざがる爲めに變つたと同然である。

新橋へは迎に來て呉れた。車を備つて宿へ案内して呉れた。のみならず、忙しいうちを無理に算段して蝸牛親子して寝る庵を借りて呉れた。小野さんは昔

の通り親切である。父も左様に云ふ。自分もさう思ふ。然し寄り付けない。ブラット、フォームを下りるや否や御荷物をと云つた。小さい手提の荷にはならず、持つて貰ふ程でもないのを無理に受取つて、漆掛と一所に先へ行つた。刻足の後姿を見たときに——是はと思つた。先へ行くのは、遙々と来た二人を案内する爲めではなく、時候後れの親子を追ひ越して馳け抜ける爲めの様に見える。割符とは瓜二つを取つてつけて較べる爲の證據である。天に懸る日より貴しと護るわが夢を、五年の長き香洩る『時』の袋から現在に引き出してよも間違はあるまいと見較べて見ると、現在にはやくも遠くに立ち退いて居る。握る割符は適用しない。

始め穴を出で、眩き故と思ふ。少し慣れたらばと、逝く日を枕に、一度逢ひ、二度逢ひ、三合逢ひ四度と重なるたびに、小野さんは愈々鄭寧になる。鄭寧になるに付けて、小夜子は愈々近寄り難くなる。

やさしく咽喉に滑り込む長い顎を奥へ引いて、上眼に小野さんの姿を眺めた小夜子は、變る眼鏡を見た。變る髪を見た。變る髪を凡そ變る装ひとを見た。凡ての變るものを見た時、心の底でそつと嘆息を吐いた。あゝ。

**印象** 何故自分には馴々しく、親しく近寄つて呉れぬのかしら——と小夜子の長息が耳に響くやうだ。

八

『成程』

和尚の聲は例に似ず沈んでゐる。「さうかと申して生の母でない私が厭制がましく、無暗に差出た口を利きます

虞美人草

甲野の繼母  
は甲野に早  
く嫁でもとら  
せてやつたら  
さして絶えず



居た「氣にして  
思ひあまつた  
やうに宗匠  
の老人に村談  
に來た」

と、御聞かせ申し度ない様な紛紜も起りませうし……」

『ふん。困るね』

和尚は手提の煙草盆の浅い抽出から鬱金木綿の布巾を取り出して、鯨の莖を鄭重に拭き出した。

『いつそ、私から篤と談じて見ませうか。あなたが云ひ悪ければ』

『色々御心配を掛けまして……』

『さうして見るかね』

『ごんなもので御座いませう。あゝ云ふ神経が妙になつて居る所へそんな事を聞かせましたら』

『なにそりや、承知して居るから、當人の氣に障らない様に云ふ積ですがね』  
『でも萬一私が此方へ出てわざ／＼御願ひ申した様に取られると、それこそ後

が大變な騒ぎになりますから……』

『弱るね、さう、疝が高くなつてちやあ』

『丸で腫物へ障る様で……』

『ふうん』と和尚は腕組を始めた。術が短いので太い肘が無作法に見える。

謎の女は人を迷宮に導いて、成程と云はせる。ふうん云はせる。灰吹をほんと云はせる。仕舞には腕組をさせる。二十世紀の禁物は疾言と遠色である。

何故かと、ある紳士、ある淑女に尋ねて見たら、紳士も淑女も口を揃へて答へた。——疾言と遠色は、尤も法律に觸れ易いからである。——謎の女の鄭重なのは尤も法律に觸れ悪い。和尚は腕組をしてふうんと云つた。

『もし彼人が斷然家を出るご云ひ張りますと——私がそれを見て無論黙つて居る譯には参りませんが——然し當人がさうしても聞いて呉れないとすると……』

「鞆かね。鞆となると……」

「いえ、さうなつては大變で御座いますが——萬一の場合も考へて置かないと、いざと云ふ時に困りますから」

「そりや、左様」

「それを考へると、あれが病氣でもよくなつて、もう少し確かりして呉れないうちは、藤尾を片付ける譯に参りません」

「左様さね」と和尚は單純な首を傾けたが、

「藤尾さんは幾歳です」

「もう、明けて四になります」

「早いものですね。ええ。つい此間迄これつばかりだつたが」と大きな手を肩とすれ／＼出して、ひろけた掌を下から覗き込む様にする。

「いえもう、身體許大きい御座いまして、から、役に立ちません」

「……勘定すると四になる譯だ。うちの糸が二だから」

話しは放つて置くとは處かへ流れて行きさうになる。謎の女は引つ張らなければならぬ。

「此方でも、糸子さんやら、一さんやらで、御心配の所を、こんな餘計な話を申し上げて、喉人の氣も知らない呑氣な女だと覺し召すで御座いませうが……」

「いえ、さう致して、實は私の方から其事に就いて篤と御相談もしたいと思つて居た所で——一も外交官になるとか、ならんとか云つて騒いでゐる最中だから、今日明日と云ふ譯にも行かないですが、晩かれ早かれ嫁を貰はなければならぬので」

「で御座いますとも」

『就ては、その藤尾さんなんですがね』

『はい』

『あの方なら、まあ氣心も知れてゐるし、私も安心だし、一は無論異存のある譯はなし——よからうと思ふんですがね』

『はい』

『どうでせう、阿母の御考へは』

『あの通り行き届きませんものを夫程迄に仰しやつて下さるのは寔に難有い譯で御座いますが……』

『いゝぢや、ありませんか』

『さうなれば藤尾も仕合せ、私も安心で……』

『御不足なら兎も角、さうでなければ……』

『不足所ぢや御座いませぬ。願つたり叶つたりで此上もない結構な事で御座います、只彼人に困りますので。一さんは宗近家をお襲ぎになる身體で入らつしやる。藤尾が御氣に入るか、入らないかは分りませんが、まあ貰つて頂いたと致した所で、差し上げた後で、飲吾が矢張り今の様では私も實の所甚だ心細い様な譯で……』

『アハ、ハ、さう心配しちや際限がありませんよ。藤尾さんさへ嫁に行つて仕舞へば飲吾さんにも責任が出る譯だから、自然と考へもちがつてくるに極つてゐる。さうなさい』

『さう云ふもので御座いませうか』

『それに御承知の通、父様がいつぞや仰しやつた事もあるし、さうなれば亡くなつた人も満足だらう』

甲野の繼母  
が二階で宗  
近の老人と語  
つて居る時  
階下では一と

糸子がこん  
な事を語つて  
居た。

「色々御親切に難有う存じます。なに配偶さへ生きて居りますれば、一人で——こん——こんな心配は致さなくつても宜しい——ので御座いますが」  
謎の女の云ふ事は次第に濕氣を帯びて来る。世に疲れたる筆は此濕氣を嫌ふ辛うじて謎の女の謎をこゝ迄叙し來つた時、筆は一步も前へ進む事が厭だと云ふ。日を作り、海と陸と凡てを作りたる神は、七日目に至つて休めと言つた。謎の女を書きこなしたる筆は、日のあたる別世界に入つて此濕氣を拂はねばならぬ。

「糸公、あれは叔父さんの金時計を貰ふ約束があるんだよ」

「叔火さんの？」と軽く聞き返して、急に聲を落とす。

「だつて……」と云ふや否や、黒い眸は長い睫の裏にかくれた。

派出な色の絹紐がちらりと前の方へ顔を出す。

「大丈夫だ。京都でも甲野に話して置いた」

「さう」と俯目になつて顔を半上げる。危ぶむ様な、慰める様な笑ひが顔に共に浮いて来る。

「元さんが今に外國へ行つたら、お前に何か買つて送つてやるよ」

「今度の試験の結果はまだ分らないの」

「もう直だらう」

「今度は是非及第なさいよ」

「え、うん。アハ、ハ、ハ。まあ好いや」

「好かないの。——藤尾さんはね。學問がよく出來て、信用のある方が好きなんですよ」

『兄さんは學問が出来なくつて、信用がないのかな』

『さうぢやないのよ。さうぢやないけれども——まあ例に云ふと、あの小野さん云ふ方があるでせう』

『うん』

『優等で銀時計を頂いたつて。今博士論文を書いて居らつしやるつてね。——藤尾さんはあゝ云ふ方が好きなのよ』

『さうか。おや——』

『何がおや——なの。だつて名譽ですわ』

『兄さんは銀時計も頂けず、博士論文も書けず。落第はする。不名譽の至だ』

『あら不名譽だと誰もいやしないわ。只あんまり氣樂過ぎるのよ』

『ホ、、可笑しいのね。何だか些とも苦にならない様ね』

『糸公、兄さんは學問も出来ず落第もするが——まあ廢さう、さうでも好い、兎に角御前兄さんを好い兄さんと思はないかい』

『そりや思ふわ』

『小野さんとどつちが好い』

『そりや兄さんの方が好いわ』

『甲野さんとは』

『知らないわ』

深い日は障子を透して糸子の頬を暖かに射る。俯向いた額の色丈がいちじろしく白く見えた。

『おい頭へ針が刺さつてる。忘れると危ないよ』

「あら」と翻へる襦袢の袖のほのめくうちを、二本の指にこくと抑へて、軽く抜き取る。

「ハ、ハ、見えない所でも、旨く手が届くね。盲目にすると疝の好い按摩さんが出来るよ」

「だつて慣れてるんですもの」

「えらいもんだ。時に糸公面白い話を聞かせ様」

「なに」

「京都の宿屋の隣に琴を引く別嬪が居てね」

「端書に書いてあつたんでせう」

「あゝ」

「あれなら知つてゝよ」

「それがさ、世の中には不思議な事があるもんだね。兄さんと甲野さんと嵐山へ御花見に行つたら、其女に逢つたのさ。逢つた許ならいゝが、甲野さんが其女に見惚れて茶碗を落して仕舞つてね」

「あら、本當？ まあ」

「驚いたらう。夫から急行の夜汽車で歸る時に、亦其女と乗り合せてね」

「嘘よ」

「ハ、ハ、とうとう東京迄一所に來た」

「だつて京都の人がさう無暗に東京へ來る譯がないぢやありませんか」

「それが何かの因縁だよ」

「人を……」

「ああ御聞きよ。甲野が汽車の中であの女は嫁に行くんだらうか、どうだらう」

かつて、頻りに心配して……』

『もう澤山』

『澤山なら廢さう』

『其女の方は何ぞ仰しやるの、名前は』

『名前かい——だつてもう澤山だつて云ふぢやないか』

『教へたつて好いちやありませんか』

『ハ、ハ、さう真面目にならなくつても好い。實は嘘だ、全く兄さんの作り事さ』

『悪らし』

糸子は目出度笑つた。

印象 兄妹の楽しさうに語り合つて居るさまが、眼に見るやうだ。

九

『糸子さん驚いた様ですな』と甲野さんは帽子を眉深く被つて立つ。

糸子は振り返る。夜の笑は水の中で詩を吟ずる様なものである。思ふ所へは届かぬかも知れぬ。振り返る人の衣の色は黄に似て夜を欺くを、黒いものが幾筋も豎に刻んでゐる。

『驚いたかい』と今度は兄が聞き直す。

『貴方は』と糸子を差し置いて藤尾が振り返る。黒い髪陰から颯と白い顔が映る。頬の端は遠い火光を恥ぢてほの赤い。

『僕は三遍目だから驚かない』と宗近君は顔一面を明かるい方へ向けて云ふ。  
『驚くうちは樂があるもんだ。女は樂しみが多くて仕合せだね』と甲野さんは

甲野は、宗近や藤尾等と夜の博覽會に出かけた。

長い體軀を眞直に立てた儘藤尾を見下した。

黒い眼が夜を射て動く。

『あれが臺灣館なの』と何気なき糸子は水を横切て指を點す。

『あの一番右の前へ出てゐるのが左様だ。あれが一番善く出来てゐる。ねえ甲野さん』

『夜見る』と甲野さんはすぐ但書を附け加へた。

『ねえ、糸公、丸で龍宮の様だらう』

『本當に龍宮ね』

『藤尾さん、どう思ふ』と宗近君はどこ迄も龍宮が得意である。

『俗ぢやありませんか』

『何が、あの建物ががね』

『あなたの形容がですよ』

『ハ、ハ、甲野さん、龍宮は俗だ』と云ふ御意見だ。俗でも龍宮ぢやないか』

『形容は旨く中ると俗になるのが通例だ』

『中ると俗なら、中らなければ何になるんだ』

『詩になるでせう』と藤尾が横合から答へた。

『だから詩は實際に外れる』と甲野さんが云ふ。

『實際より高いから』と藤尾が註釋する。

『すると旨く中つた形容が俗で、旨く中らなかつた形容が詩なんだね。藤尾さん無味くつて中らない形容を云つて御覽』

『云つて見ませうか。——兄さんが知つてゐるでせう。聽いて御覽なさい』  
と藤尾は鋭い眼の角から歛吾を見た。眼の角は云ふ。無味くつて中らない形容



は哲學である。

『あの横にあるのは何』と糸子が無邪氣に聞く。

燄の線を闇に渡して空を横に切るは屋根である。堅に切るは柱である。斜に切るは葺できる。臙の奥に星を埋めて、限りなき夜は薄黒く地ならしたる上に、稻妻の穂は一を引て虚空を走つた。二を引いて上から落ちて来た。卍を描いて花火の如く地に近く廻轉した。最後に穂光を逆に返して帝座の眞中を貫けと許抛げ上げた。かくして塔は棟に入り、棟は床に連なつて、不忍の池の此方から見渡す向を、右から左へ隙間なく埋めて、大いなる火の繪圖面が出来た。

藍を含む黒塗に、金を惜まぬ高時繪は堂を描き、樓を描き、廻廊を描き、曲欄を描き、圓塔柱の數々を描き盡して、猶餘りあるを是非に用ひ切らん爲めに描ける上を往きつ戻りつする。縦横に空を走る燄の線は一點一劃を亂すことな

く整然として一點一劃のうちに生きて居る。動いて居る。しかも明かに動いて動く限りは形を崩す氣色が見えぬ。

『あの横に見えるのは何』と糸子が聞き。

『あれが外國館。丁度正面に見える。此處から見るのが一番綺麗だ。あの左にある高い丸い屋根が三菱館。——あの恰好かい。何と形容するかな』と宗近君は一寸躊躇した。

『あの眞中丈が赤いのね』と妹が云ふ。

『冠に紅玉を嵌めた様だ事』と藤尾が云ふ。

『成程、天賞堂の廣告見た様だ』と宗近君は知らぬ顔で俗にして仕舞ふ。甲野さんは軽く笑つて仰向いた。空は低い。薄黒く大地に通る夜の中途に、煮え切らぬ星が路頭に迷つて放下がつてゐる。柱と速なり、葺と積む萬點の燄しみに

天を浸して、寝とほけた星の眼を射る。星の眼は熱い。

天六

「空が焦ける様だ。——羅馬法王の冠かも知れない」と甲野さんの視線は谷中から上野の森へかけて大なる圏を畫いた。

「羅馬法王の冠か、藤尾さん、罰馬法王の冠はさうだい。天賞堂の廣告の方が好ささうだがね」

「孰れでも……」と藤尾は澄ましてゐる。

「孰れでも差支なしか。兎に角女王の冠ぢやない。ねえ甲野さん」

「何とも云へない。クレオパトラはあんな冠をかぶつてゐる」

「どうして御存じなの」と藤尾は鋭く聞いた。

「御前の持つてゐる本に繪がかいてあるぢやないか」

「空より水の方が綺麗よ」糸子が突然注意した。對話はクレオパトラを離れる

晝でも死んでゐる水は、風を含まぬ夜の影に押し付けられて、見渡す限り平かである。動かぬは何時の事からか、静かなる水は知るまい。百年の昔に堀つた池ならば、百年以來動かぬ。五十年の昔ならば、五十年以來動かぬとのみ思はれる水底から、腐つた蓮の根がそろ／＼青い芽を吹きかけて居る。泥から生れて鯉と鮒が、闇を忍んで緩やかに腰を動かしてゐる。イルミネーションは高い影を逆まにして、二丁餘の岸を、尺も残さず眞赤になつて此静かなる水の上に倒れ込む。黒い水は死につもばつと色を作す。泥に潜む魚は燃ゆる。

濕へる鉄は、一抹に岸を伸して、明かに向側へ渡る。行く道に横はる凡てのものを染め盡して已まざるを、ぶつりと截つて長い橋を西から東へ懸る。白い石の野羽玉の波を跨ぐアーチの数は二十、欄に盛る擬寶珠は悉く夜を照らす白光の珠である。

小野は、四五  
日は孤堂先生  
の世話やら用  
事やらで、甲

野の家へ立寄  
らなかつた。  
小夜子は先生  
と小夜子を博  
覧會に案内し  
たりした。

「空より水の方が綺麗よ」と注意した糸子の聲に連れて残る三人の眼は、悉く水と橋とに聚つた。二間毎に高く石欄干を照らす電光が、遠き此方からは、行儀よく一列に空に懸つて見える。下をぞろ／＼人が通る。

「あの橋は人で埋つて居る」と宗近君が大きな聲を出した。

**印象** 不忍池畔の博覧會の夜景が、眩しく眼に映つて来る。自分もまるでその中に居るやうだ。

10

小夜子を捨てる爲ではない、孤堂先生の世話が出来る爲めに、早く藤尾と結婚して仕舞はなければならぬ。——小野さんは自分の考へに間違はない筈だと

思ふ。人が聞けば立派に辯解が立つと思ふ。小野さんは頭腦の明瞭な男である。こゝ迄考へた小野さんはやがて机の上に置いてある。茶の表紙に豊かな金文字を入れた厚い書物を開けた中からヌーボー式に青い柳を染て赤瓦の屋根が少し見える葉があらはれる。小野さんは左の手に葉を滑らして、細かい活字を金縁の眼鏡の奥から読み始める。五分許は無事であつたが、しばらくすると、何時の間にか、黒い眼は頁を離れて筋違に日脚の伸びた障子の棧を見詰めてゐる。——四五日藤尾に逢はぬ、屹度何とか思つてゐるに違ひない。唯の時なら四五日が十日でも左して心配にはならぬ。過去に追ひ付かれた今の身には、梳る間も千金である。逢へば逢ふ度に願ひ的は近くなる。逢はねば元の君と我にたぐり寄すべき戀の綱の寸分だも縮まる縁はない。のみならず、魔は節穴の隙にも射す。逢はぬ半日に日が落ちぬとも限らぬ、籠る一夜に月は入る。等閑の

三四五日に藤尾の眉は如何な稻妻が差してゐるかは夢測り難い。論文を書く爲めの勉強は無論大切である。然し藤尾は論文よりも大切である。小野さんはばたりと書物を伏せた。

芭蕉布の襖を開けると、押入の上段は夜具、下には柳行李が見える。小野さんは行李の上に疊んである背廣を出して手早く着換へ終る。帽子は壁に主を待つ。がらりと障子を開けて、赤い鼻緒の上草履に、カシミヤの靴足袋を無理に突き込んだ時、下女が来る。

「おや御出掛、少し御待ちなさいよ」

「何だ」と草履から顔を上げる。下女は笑つてゐる。

「何か用かい」

「え」と矢張り笑つてゐる。

「何だ。冗談か」と行かうとすると、却し立ての草履が片方足を離れて、拭き込んだ廊下を洋燈部屋の方へ滑つて行く。

「ホ、ホ、ホ、餘り周草履もんだかる。御客様ですよ」

「誰だい」

「あら待つてた癖に空つとぼけて……」

「待つてた？何を」

「ホ、ホ、大變眞面目ですね」と笑ひながら、返事も待たず、入口へ引き返す小野さんは氣掛な顔をして障子の傍に上草履を揃へた儘廊下の突當りを眺めて居る。何が出て来るかと思ふ。焦茶の中折が鴨居を越す程の高い脊を伸ばして、薄暗い廊下のはづれに折目正しく着こなした背廣の地味な丈に、胸開の狭い胴衣から白い襟が著しく上品に見える。小野さんは委よく着こなした衣裳